福岡市博多区

南八幡遺跡群(Ⅱ)



福岡市埋蔵文化財調査報告書第128集

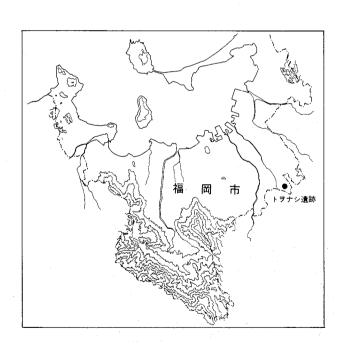
1986年 福岡市教育委員会

福岡市博多区

南八幡遺跡群(Ⅱ)



福岡市埋蔵文化財調査報告書第128集



1986年 福岡市教育委員会

序 文

福岡市は『21世紀へつなごう緑と心豊かな活力の街』を基本理念として都市づくりを進めています。人間優先の道づくりもその一つです。

このたび国鉄南福岡駅前における自転車等の駐車対策として2階建駐車場の建設が計画され、 その工事に先立ってトヨナシ遺跡の発掘調査を実施いたしました。

今回の発掘調査によって古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、福岡市の歴史を語るうえで重要な資料を得ることができました。

これまで1500年の長い間、地中深く静かに眠っていた遺跡は残念ながら消滅してしまいましたが、駐車場はこれにかわる21世紀へ向けての新しい創造物として設計建設されたものと思います。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの人々の御協力に対し、心から感謝の意を表します。 本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となることを願うとともに研究資料として も活用いただければ幸いです。

> 昭和61年3月31日 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎



歩道を占拠した自転車(南福岡駅前 1984年12月)

例 言

- 1. 本書は、国鉄南福岡駅前における駐輪場建設工事に先行して 発掘調査した南八幡遺跡群トヲナシ遺跡の報告書である。
- 2. 今回報告する遺跡は、福岡市博多区寿町二丁目 119 1 にあり、旧字名からトヲナシ遺跡とした。
- 3. トヲナシ遺跡の発掘調査は、1984年10月より開始し、12月まで実施した。
- 4. トヲナシ遺跡は、発掘調査終了後に建設工事が行なわれ、現在2階建の駐輪場が完成している。
- 5. 本書に掲載した遺構、遺物の実測図と遺物写真は、各々縮尺を統一するように努めた。竪穴住居跡は1/40、かまどは1/30、掘立柱建物跡は1/50か1/60、遺物は実測図、写真ともに1/3である。また、遺物は次の頭文字を付し、各遺構ごとに通し番号とした。

須恵器(Su) 土師器(H) 石器(S) 瓦(K)

- 6. 本書の編集、執筆は、大庭康時と力武卓治が協議、分担して 行なった。遺物整理から報告書作成まで、村田喜代美さんと 松田美富さんの多大なご協力があった。
- 7. トヲナシ遺跡の出土遺物や、実測図、写真などの記録類は、 福岡市埋蔵文化財センターに保管収蔵される予定である。



完成した自転車駐車場

本文目次

第1章 はじ	めに	1
1. 発掘調査	に至るまで	1
2. 発掘調査	の組織と構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2章 発掘	調査の記録	4
1. 発掘調査	の概要と経過	4
2. 遺構と遺	物······	6
住居跡	第 1 号住居跡	11
	第 2 号住居跡	18
	第 3 号住居跡	21
	第 4 号住居跡·····	26
	第 5 号住居跡	31
	第 6 号住居跡	34
	第 7 号住居跡	34
	第 8 号住居跡	38
	第 9 号住居跡·····	40
建物跡	第1号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	42
	第 2 号掘立柱建物跡	44
	第 3 号掘立柱建物跡	46
	第 4 号掘立柱建物跡	48
竪穴	第1号竪穴	49
	第 2 号竪穴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	…5€
	第 3 号竪穴	59
第3章 小	結	60

挿 図 目 次

7	トヲナシ遺跡の位置と周辺の遺跡(縮尺1/25,000)	2
2	トヲナシ遺跡地形図	3
3	トヲナシ遺跡地形図	3
4	トヲナシ遺跡全景(南から)	
5	発掘調査の範囲図(縮尺 1/500)	
6	トヲナシ遺跡全景(北から)	
7	発掘調査前の協議	
8	発掘作業風景·····	
9	遺跡説明の看板・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6
10	トヲナシ遺跡グリッド図(縮尺 1/200)	
11	トヲナシ遺跡全景(南から)	
12	トヲナシ遺跡遺構配置図(縮尺 1/100)折りこみ	8~9
13	トヲナシ遺跡北側部	
14	トヲナシ遺跡南側部	
15	第1号住居跡 実測図(縮尺1/40) ····································	10
16	第1号住居跡遺物出土状況	
1 <i>7</i>	第1号住居跡かまど実測図(縮尺1/3)	
18	第1号住居跡かまど断面	
19	第 1 号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)	
20	第 1 号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/30)	
21	第 1 号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)	
22	第 1 号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)	
23	第1号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)	
24	第2号住居跡 実測図(縮尺1/40)·······	18
25	第2号住居跡西壁の土層実測図(縮尺1/40)	
26	第2号住居跡	19
27	第2号住居跡かまど実測図(縮尺1/30)	
28	第2号住居跡かまど	
29	第2号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)	20
30	第2号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)	20
31	第3号住居跡 実測図(縮尺1/40)······折りこみ······	··20~21

32	第3号住居跡遺物出土状況21
33	第3号住居跡発掘作業風景21
34	第3号住居跡(南西から)22
35	第3号住居跡(西から)22
36	第3号住居跡かまど実測図(縮尺1/3)23
3 <i>7</i>	第3号住居跡かまど23
38	第3号住居跡かまど23
39	第3号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)24
40	第3号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/2、1/3)25
41	第3号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)25
42	第4号住居跡
43	第4号住居跡26
44	第4号住居跡実測図(縮尺1/40)折りこみ26~27
45	第4号住居跡かまど実測図(縮尺1/30)27
46	第4号住居跡かまど27
47	第4号住居跡かまど27
48	第4号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)28
49	第4号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)29
50	第4号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)30
51	第5号住居跡 実測図(縮尺1/40)············折りこみ·······30~31
52	第5号住居跡31
53	第5号住居跡31
54	第5号住居跡かまど実測図(縮尺1/30)32
55	第5号住居跡かまど32
56	第5号住居跡かまど32
<i>57</i>	第5号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)32
58	第5号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)33
59	第5号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)34
60	第6・7号住居跡実測図(縮尺1/40)35
61	第6 · 7号住居跡36
62	第6・7号住居跡36
63	第6号住居跡かまど実測図(縮尺1/30)37
64	第6号住居跡かまど37
65	第6号住居跡かまど37

44	第6・7号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)37
66	第8号住居跡 実測図(縮尺1/40)········38
67	第8号住居跡かまど実測図(縮尺1/30)
68	第8号住居跡かまと、 39 第8号住居跡かまと 39
69	第8号住居跡
<i>7</i> 0	
71	第8号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)
<i>7</i> 2	第9号住居跡 実測図(縮尺1/40)···········40
<i>7</i> 3	第9号住居跡·············41
74	第9号住居跡····································
<i>7</i> 5	第1号掘立柱建物跡 実測図(縮尺1/60)
76	第 1 号掘立柱建物跡
77	第 1 号掘立柱建物跡
<i>7</i> 8	第2号掘立柱建物跡 実測図(縮尺1/50)
79	第2号掘立柱建物跡
80	第2号掘立柱建物跡45
81	第3号掘立柱建物跡 実測図(縮尺1/50)······················46
82	第3 4号掘立柱建物跡 47
83	第3 · 4号掘立柱建物跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
84	第4号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/50)
85	第1号竪穴実測図(縮尺1/60)49
86	第 1 号竪穴50
8 <i>7</i>	第 1 号竪穴
88	第1号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)
89	第 1 号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)
90	第1号竪穴出土遺物(縮尺 1/3)
91	第 1 号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)54
92	第 1 号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)
93	第2号竪穴実測図(縮尺1/40)56
94	第2号竪穴出土遺物(縮尺 1/3)56
95	第2号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)
96	第2号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)
97	第3号竪穴出土実測図(縮尺1/40)59
98	第3号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)60

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで

九州の中枢管理都市をめざす福岡市は、交通、住宅、上・下水道などの都市基盤の整備が精力的に進められているものの、一方では人口集中化に伴う様々な都市問題が起りつつある。特に朝夕の交通ラッシュは大都市と同じような様相を呈してきている。住宅開発と交通体系の整備とは有機的な関連が望まれるのであるが、交通の基幹をなす鉄道、地下鉄の各駅前における放置された自転車やバイクの数は、今日の都市問題の一つの象徴でもある。福岡市博多区の国鉄南福岡駅前もその例外ではない。この地区は西日本鉄道も交叉しており、福岡市の中心である天神へ20分の通勤圏であることから住宅開発が急激に進んでいる。福岡市南部に隣接する春日市、大野城市などはベッドタウン化が著しい。これらの新興住宅地から都心への通勤、通学はバス路線の整備が遅れているために自転車やバイクを利用して鉄道などへ乗継ぐ方法がとられ、駅前での違法駐車という結果を招いている。これらの自転車、バイクの多くは、歩道を占拠しており、本来の生活道路としての機能を奪っている。

このために福岡市は、秩序ある住宅開発と交通体系の整備を計画する一方で、各駅前で駐輪場建設を進めている。南福岡駅においては、駅前にあった那珂土木事務所の跡地に2階建の駐輪場を建設することになり、担当課である土木局街路課より、文化課に埋蔵文化財の有無についての照会がなされた。

2. 発掘調査の組織と構成

調 查 委 託 福岡市土木局街路課

調 查 主 体 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係

柳田 純孝、松延 好文(事務担当)

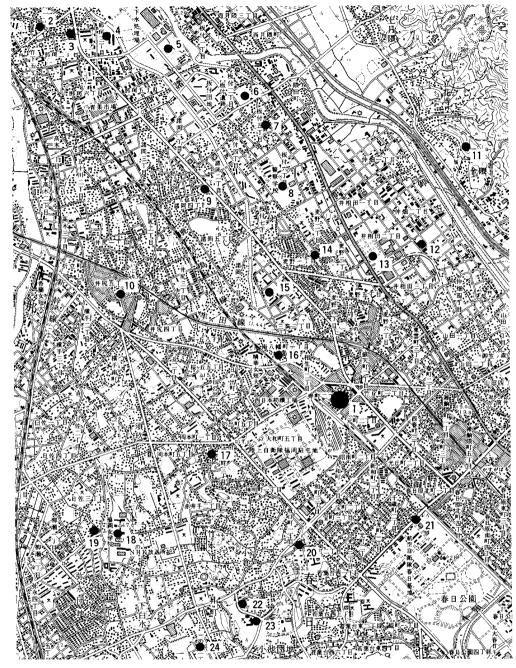
山崎 龍男、田中 寿夫(試掘調査)、力武 卓治、大庭 康時(発掘調査)

調查作業員 大部茂久、権藤利雄、山崎光一、池田光男、山口 満、三浦 力、岸原藤雄、 曽根崎昭子、桑野正子、井手口美代子、黒木静子、江越初代、関 政子、

古賀博子、村崎祐子、尾崎文枝、徳永道子、石本ミスエ、野口ミヨ、

長野康子、高野皓代、関加代子、宮川登志子、杉野邦子

整理作業員 深沢美代子、末永トシ子、鶴ちとせ、大庭智子、村田喜代美、松田美富 この他にも地元の多くの方々のご協力がありました。ありがとうございました。

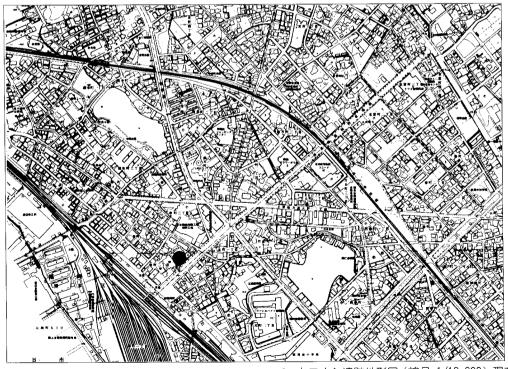


1 トヲナシ遺跡の位置と周辺の遺跡(縮尺 1/25,000)

1	トヲナシ遺跡	9	諸岡遺跡	17	須玖岡本遺跡
2	那珂八幡古墳	10	井尻大塚古墳	18	□佐原遺跡
3	那珂沼口遺跡	11	金隈遺跡	19	弥永原遺跡
4	那珂深ヲサ遺跡	12	仲島遺跡	20	伯玄社遺跡
5	那珂久平遺跡	13	井相田遺跡	21	原町遺跡
6	板付遺跡	14	麦野下古賀遺跡	22	大南遺跡
7	板付南遺跡	15	三筑遺跡	23	大谷遺跡
8	高畑遺跡	16	南八幡遺跡	24	一の谷遺跡



2 トヲナシ遺跡地形図 (縮尺 1/10,000) 昭和初期



3 トヲナシ遺跡地形図(縮尺 1/10,000)現在

第2章 発掘調査の記録

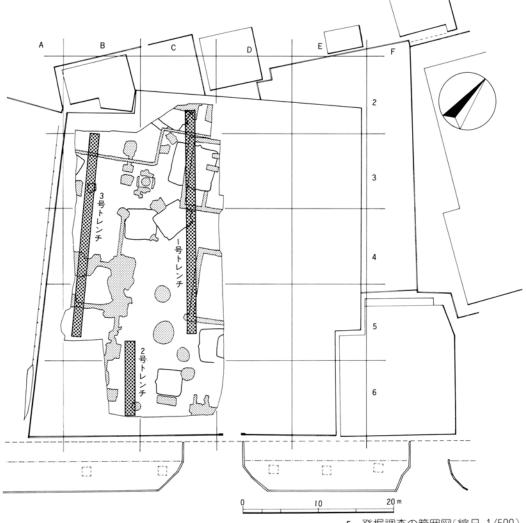
1. 発掘調査の概要と経過

試掘調査

土木局街路課が駐輪場建設を計画した用地は、博多区寿町二丁目119-1の那珂土木事務所の 跡地である。照会を受けた文化課は、当該地が昭和56年に作成発行した『福岡市文化財分布地 図(東部1)』に記載登録されている南八幡遺跡群の範囲内に入っていることから現地踏査をし た上で埋蔵文化財が存在している可能性が強いことを回答した。街路課は他に駐輪場の用地を 確保できないために、遺跡の発掘を前提としての協議を要望してきた。このため文化課は、事 前審査担当の山崎と田中が昭和59年4月21日に試掘調査を実施することになった。駐輪場建設 予定地は、那珂土木事務所跡地のうち西側の約1,000㎡で、建物取り壊し後に整地されており 旧地形を留めていない。試掘は対象地に3本の南北トレンチを設定し、遺構の検索と土層の観 察を行なった(挿図 5)。この結果、地山の明褐色ロームは北から南に傾斜しており、土層は堆 積の最も厚い2号トレンチ南端部で第1層整地層(20cm)、第2層攪乱(20cm)、第3層暗褐色粘 質土(10cm)、第4層黒色粘質土(10cm)、第5層黒褐色粘質土(15cm)の5層が観察された。大 部分は遺物包含層である黒褐色粘質土が地山上に薄く乗っているだけで、全体的に攪乱、削平 が著しいことがわかった。しかし、各トレンチとも住居跡と推定される落ちこみやピットなど が確認されたこと、周辺の遺跡分布などから全面の発掘調査が必要という結論となった。この 試掘結果をもとに本調査にむけて街路課と協議を重ねたが、同じ街路課の博多駅築港線の発掘 調査をしていた力武と大庭が終了後に担当することになり、この間に付近住民への連絡や作業 用プレハブ建設などの準備をすることになった。



4 トヲナシ遺跡全景(南から)



5 発掘調査の範囲図(縮尺 1/500)



6 トヲナシ遺跡全景(北から)

6 遺跡と遺物

事前協議

那珂台地は、奴国王墓の推定地である春日 市須玖・岡本遺跡や銅鐸鋳型を出土した大谷 遺跡などがある春日丘陵から北に約6kmのび ている。この台地には北側から比恵、那珂、 五十川、諸岡、井尻、横手、曰佐、弥永原の 各遺跡群が途切れることなく展開しており、

『弥生銀座』と呼ばれるようにわが国の弥生時代を語るうえで重要な遺跡が数多く分布している。発掘調査を実施することになった当該地は、南八幡遺跡群に入るがこの遺跡群は地形的には春日丘陵の北端部に小さく突出した台地上にあり、先の那珂台地とは区別できる。現在は高度に市街化しているために旧地形を復原できないが、戦前の地図によると南福岡駅前付近を中心にして手の掌状に小さな台地が北に向かって派生しており、その間の谷部は用水池に利用されている。旧字名のトラナシを遺跡名としたが、これまでにこの遺跡群内においての発掘調査は1例にすぎない。

試掘調査後、街路課との協議を重ね、本調査を建設工事に支障のないように10月17日より2か月の予定で開始した。この間、南区野多目地区の下水道工事に伴う発掘調査も併行せざるを得なかったが、12月15日に予定通りに終了した。発掘現場が道路に面していたこともあって、見学者が多く、遺跡説明用のパンフレットを作成するなどして埋蔵文化財に対しての市民の理解を深めてもらうように努めた。



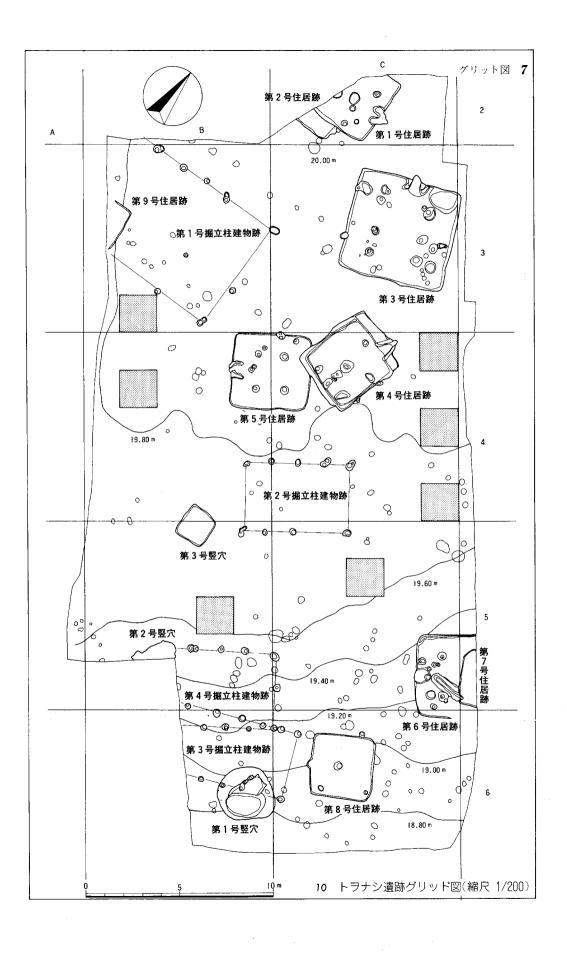
7 発掘調査前の協議



8 発掘作業風景



9 遺跡説明の看板





11 トヲナシ遺跡全景(南から)





13 トヲナシ遺跡北側部

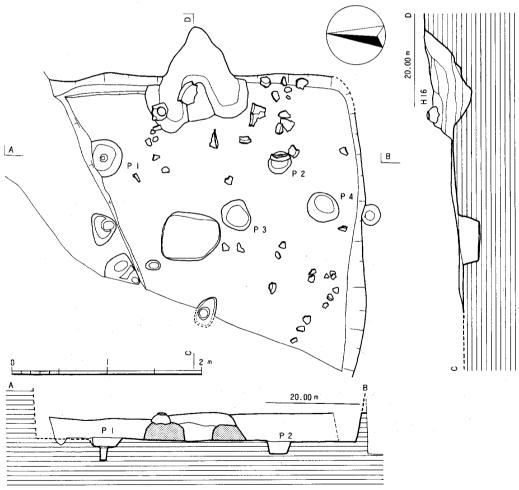


14 トヲナシ遺跡南側部

2. 遺構と遺物

本 調 査

発掘調査は、整地層のマサ土と建物の基礎などを重機によって除去することから開始した。 検出した地山面は、ほぼ平担をなしているが、中央部から南側にかけて傾斜が強くなり、南北 端との差は約130 cmを測る。このことからトヲナシ遺跡は南八幡遺跡群の台地南縁部に位置し ていることがわかる。確認した遺構は、竪穴住居跡 9 軒、掘立柱建物跡 4 棟、竪穴 3 基であるが、 この他にも多数のピットがあり後世の攪乱、削平を考慮すると、さらに多くの遺構が存在したも のと思われる。次に住居跡、建物跡、竪穴の順に遺構と出土遺物について記す。また、良好なロー ムが残っていたことから挿図10のように 2 m グリッドを 7 か所に設定し旧石器の検索も行なった。



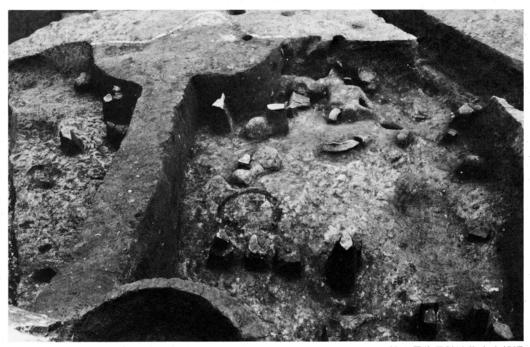
15 第1号住居跡実測図(縮尺 1/40)

(1) 住 居 跡

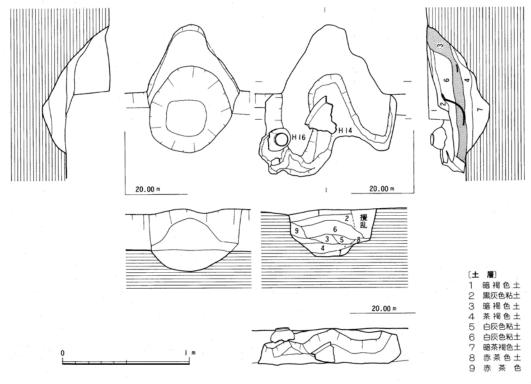
9軒の竪穴住居跡を検出し、その検出順に第1号から第9号の番号を付した。このうち第1号と第2号、第4号と第5号、第6号と第7号住居跡は切りあっている。

第1号住居跡 (16~23)

第1号住居跡は、発掘区の北端部に位置する。住居跡の北側は後世の攪乱を受け、さらに西壁も発掘区域外に出ているために全体を確認したわけではない。検出したのは東壁 320 cm、南壁 310 cmである。東壁の高さは20cm、南壁は50cmを測り、両壁ともほぼ直線をなす。両壁のなすコーナーは現代の排水管によって破壊されているが、これらのことから方形のプランが推測される。床面は、西に向かってわずかな傾きがみられ、7個のピットがある。これらのうち P3と P4 は浅くかつ大きいことから柱穴ではなく、P1と P2 が主柱穴であろう。その間隔は190 cmを測る。東壁には粘土で築かれたかまどがあり、このかまどより北側には幅10cmの浅い壁溝が掘られている。かまどの位置が東壁の中央にあると仮定すれば東壁の全長は340 cmとなり、住居跡の中心軸と P1と P2とを結ぶ線の中心点とは、ほぼ一致することになる。床面には須恵器、土師器などの遺物が散乱した状況で出土した。床面の西側半分は地山ではなく、茶褐色土であったために遺物取り上げ後に清掃を繰り返したところ、張り床されていることがわかった。さらにその下部から別の住居跡の覆土が現われ、この住居跡を第2号住居跡とした。



16 第 1 号住居跡遺物出土状況



17 第1号住居跡かまど実測図(縮尺 1/30)

かまど 東壁に灰色粘土を用いて構築されており、南壁とのコーナーからは 170 cmの位置に ある。かまどの全長は、住居外の煙出部まで含めて85cmあり、両袖は外にわずかに開いている。 左袖には鉢型土器が残っていたものの、かまど上部はすでに削平を受けており、その構造は明 らかではない。かまど前面からは焼土や炭が多量に出土し、周辺には遺物が集中している。

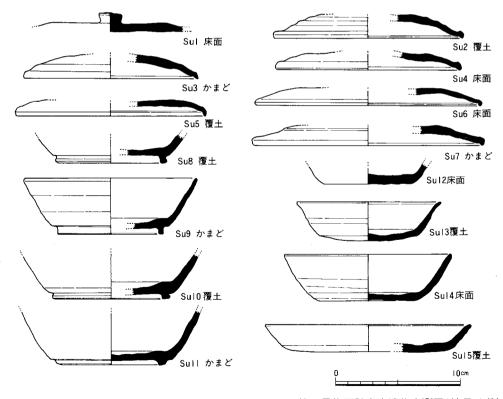


18 第1号住居跡かまど断面

出土遺物 (19~23)

住居跡の覆土、床面、かまどより須恵器、土師器、瓦が出土した。実測図の遺物番号は写真とも一致するが、実測図の番号の次には出土位置を示す床面、覆土、かまどの文字を付した。 出土遺物は、小破片のものが多く復原完形となるものは極めて少ない。

須恵器 杯蓋7点、有高台杯4点、無高台杯3点、皿1点の計15点を図示した。これらのうち Su1、4、6、12、14が床面出土、Su3、7、9、11はかまど出土で、この他は住居跡の覆土より出土している。Su1~7は杯蓋で Su1以外は天井部を欠く。Su1は天井部のみの破片である。平担な天井部の中央はわずかに窪み、ここに小さなつまみをつけている。内外面ともに横ナデされ、つまみの中央はわずかに突出している。Su2の天井部は平担ではなく、ふくらんで丸みがある。ただ横ナデ調整が粗雑なため凹凸が目立つ。口縁部は小さく折り曲げている。Su3の口径は14cmを測る。砂粒の少ない胎土が用いられて、焼成はよく灰色を呈する。Su2と同じような丸みのある天井部を持つが、口縁部との境が明瞭でない。折り曲げも直角ではなく、鈍角に外に開いている。Su4はやや厚みのある口縁部となっている。天井部は平担ではなく、調整が雑である。口縁端部は丸くおさめている。Su5は天井部が平担なために背の低い器高となっている。口縁部は直角に折り曲げられてはいるが、天井部との境はシャープなつくりでは



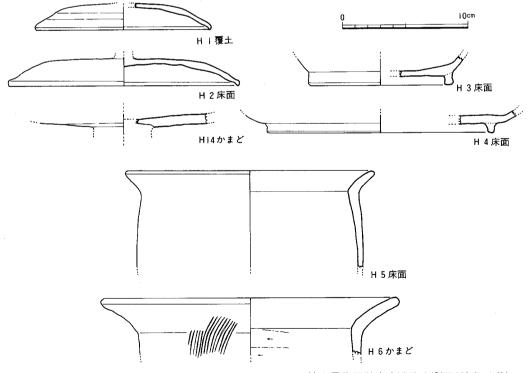
19 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)

ない。Su8~11は有高台杯である。Su8は底部と体部の一部を残すのみで全形を知りえない。高台は体部との境からわずかに内側につき、外に開いてハ字形をなす。高台断面は、その外端部が小さく上方に突出しているために方形断面をなさない。Su9は底部と体部との境は明瞭で、微妙に湾曲しながらのび、口縁部は丸くおさめている。口径は復原で14cm、高台径は9cmを測る。Su10の高台は外端部が上を向き背が低い。体部との境は丸みがあり、わずかに内湾しながらのびている。体部は内外面ともに横ナデ調整を加える。砂粒の少ない精良な胎土が用いられており、焼成もよい。Su11の体部は内湾ぎみにのび立ち上がりが強い。断面台形の高台は体部との境よりも内側につけられているが、背が低い。Su12~14は無高台杯である。Su12は底部のみの小破片で、体部との境は丸みがある。外底部は切り離しのままであるが内底部と体部内外面は横ナデ調整を施している。Su13は口径11.8cmの杯で、丸みのある底部から体部は緩やかにのび、口縁部でさらに小さく外反して丸くおさめている。器壁は薄く、調整も丁寧である。Su14は Su13よりもやや大きく口径は13.6cmを測る。外底部は平担で体部は内湾ぎみにのび、そのまま丸くおさめて口縁部をつくっている。Su15は皿で口径は16.6cmを測る。体部は直線的にのびている。口縁部は横ナデ調整。

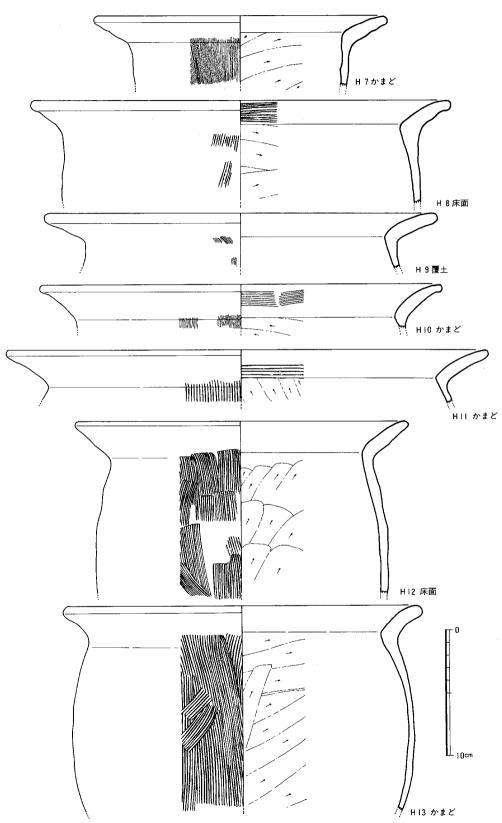
図示した点数は須恵器と同じ15点であるが、破片の出土量は土師器が須恵器よりも 個体自体が大きいこともあって圧倒的に多い。図示した土師器のうち住居跡覆土からはH1、 9の2点、床面からはH2、3、5、8、12の5点、かまどからはH4、6、7、10、11、13、14、 15、16の8点が出土している。H1、2は杯蓋である。H1は14.2cmの口径で丸みのある天井部 を持つ。口縁部は直角に小さく折り曲げている。口縁部の調整は横ナデ。H2 はやや大きめの 口径で18.1cmを測る。口縁端部は同じように小さく直角に折り曲げているが天井部はふくらみ が小さい。天井部中心にはつまみの痕跡が見られる。内面の調整は磨耗が著しく不鮮明である。 外面は横ナデ調整。H3、4 は有高台杯で、いずれも体部の大部分を欠いている。H3 の高台は 断面長方形で、底部と体部との境に垂直に貼りつけられている。したがって境は明瞭な段をな さない。また高台端部は内外端ともに横ナデで丸みを持たせている。器面調整は内外面ともに 磨滅しており観察できない。H4は19.4cmときわめて大きい高台を持つ。高台はほぼ垂直に貼 りつけられており、断面は方形に近い形状をなす。小破片のために体部の長さがわからないが その傾きはにぶい。杯ではなく皿の可能性もある。H5~13 の 9 点は甕で、口径の大小でH5、 6、7と $H8\sim$ 13の2種類に分けられる。 $H\mathbf{5}$ はく字型に外反する口縁部を持つ。体部の張りは ない。H6は口縁部の小破片で、砂粒を含む胎土が用いられている。く字型の口縁部は、わずか に内湾しながらのび端部は丸くおさめている。屈曲部内両には、にぶい稜を持つ。口縁部内面 は横ナデ調整。体部は張りがなくそのまま丸底の底部をつくるのであろう。体部内面は横方向 のヘラ削り、外面は粗いハケ目を施す。口径は24cmを測る。H7 も同じような口縁部を持つが

口縁部は直線的にのび、器壁も厚い。体部の調整も異り、外面は細かい縦のハケ目で、内面は右上がりのへう削りで粗雑なために凹凸が目立つ。H8~13の体部は張りを持っている。H8は器壁の厚い口縁部で、口径も33.8cmと大きい。口縁部の内面は粗い横ハケ目を加えている。H9は覆土より出土したもので、H8と同じような口縁部であるが、上面はふくらみ、内傾度も弱い。屈曲部内面の稜も鋭くない。H10は32.4cmの口径で、屈曲部内部はシャープな稜をなす。調整は体部内面に細かい縦ハケ目、内面に横方向のヘラ削り、口縁部内面の粗いハケ目後に口縁部にはさらに横ナデを加えている。H11は39.6cmと最も大きい口径の甕である。体部上半部は内傾が強く、口縁部は直線的に外反する。H10、11ともに体部外面には煤が付着している。H12と H13はともに底部を欠いている。H12は体部中位から頸部にかけてわずかに内傾し、く字型に外反する。体部外面のハケ目は粗いが全面に施している。H13の体部にはさらに張りがあり、最大径は中位よりやや上にある。口縁部の器壁はきわめて厚く、かつ短いつくりをなす。体部内面のヘラ削りは横と縦の二方向を繰り返すなど調整は全体的に丁寧である。H14は高杯の小破片で脚部との接合部で剝離している。H16は有高台の鉢でかまど袖に乗って出土した。口径は24cm、高台径は 9.4 cmを測る。H15も同じように鉢の口縁部であろう。

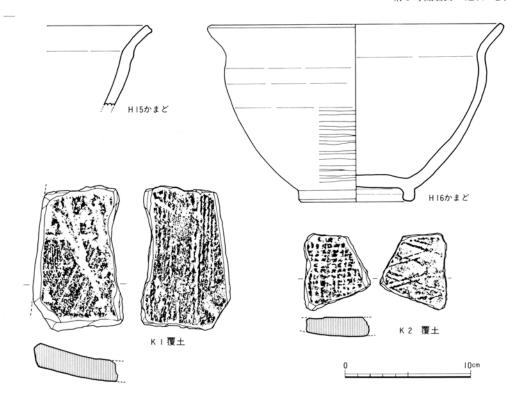
亙 覆土より2点の瓦片が出土した。K1、2ともに瓦片で、K1は布目圧痕と縄目叩きが観察できる。側縁はヘラ切り後に面取りをしている。K2には、斜格子の叩きが見られる。



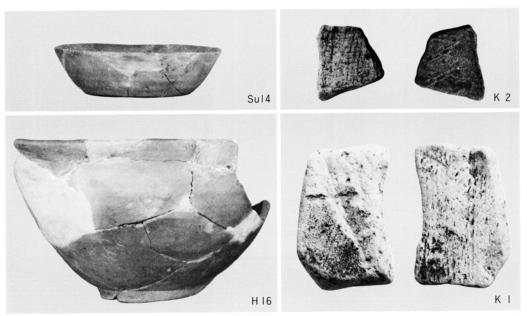
20 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)



21 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)



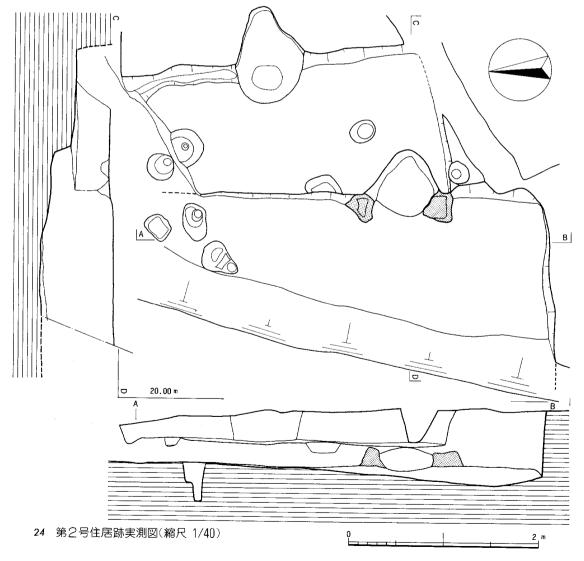
22 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)



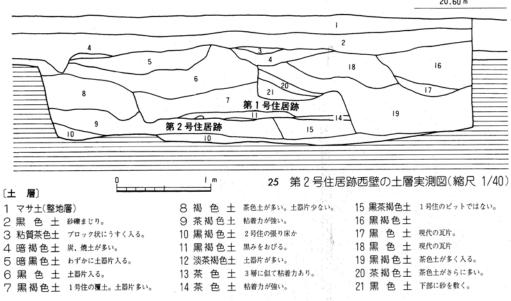
23 第1号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)

第2号住居跡(24~30)

第2号住居跡は第1号住居跡に切られており、第1号住居跡より先に営まれた方形プランの住居跡である。住居跡の中心軸は、二つの住居跡ともほぼ同じである。壁は、東壁と南壁の2壁しか残っておらず、どちらもその一部である。現在の長さは東壁が360 cm、南壁が180 cmを測る。東壁は第1号住居跡より削平されているために23cmの高さとなっているが、南壁は垂直に掘りこまれており75cmと高い壁になっている。床面は凹凸が目立ち、しかも南壁側に緩やかに傾斜しており、その差は14cmを測る。床面は地山まで掘り下げて柱穴の検索を行なったが、1個も確認できなかった。壁溝は、東、南壁とも認められていない。かまどは、東壁のやや南に寄った位置にある。挿図25は、西壁の土層実測図であるが、北壁は攪乱のために確認できなかった。

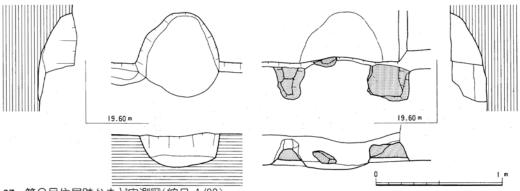


かまど 上部に第1号住居跡が重なっているために大部分が失われている。東、南壁とのコーナーから北に140cmの位置に築かれている。灰色粘土の両袖は残っているものの、わずかに25cmの長さである。楕円形に壁外に掘りこまれているが、第1号住居跡の張り床と同じ土が入っており、第1号住居跡の構築に際して完全に破壊されたらしく煙道などは確認できなかった。





26 第2号住居跡



27 第2号住居跡かまど実測図(縮尺 1/30)



28 第2号住居跡かまど



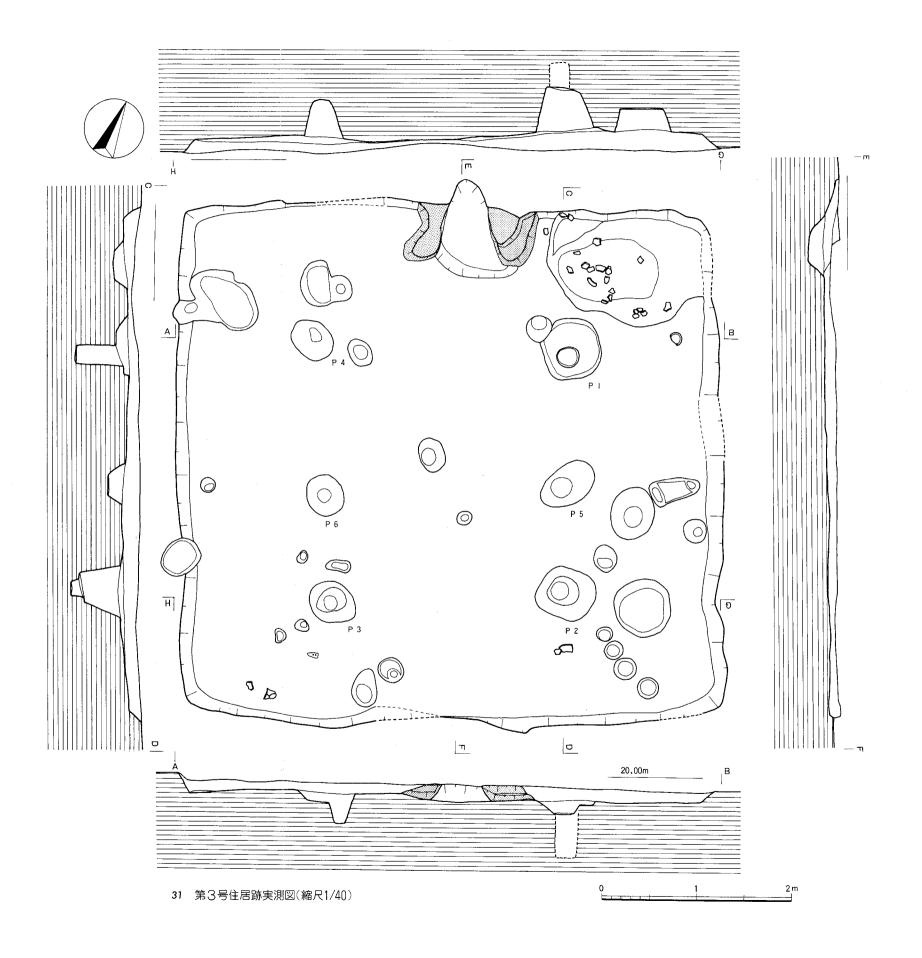
29 第2号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)

Sul床面 Su2覆土 Su3床面 Su4床面

出土遺物 (29、30)

出土遺物は、覆土、床面ともきわめて少なく、図示しえたのは須恵器の6点にすぎない。Su1、3、4、5は床面から、Su2、6は覆土からの出土で、Su5は床面と覆土出土の破片が接合した。Su1は杯蓋の小破片で口径は不明。端部の折り曲げは小さい。Su2、3は無高台杯で、体部はわずかに内湾ぎみにのびている。底部との境はSu3が稜を持つのに対し、Su2は丸みがある。Su4の杯口縁部は、体部から直線的にのびそのまま丸くおさめる。Su5、6は有高台杯である。Su5のハ字形に開く高台は体部との境より内側に貼りつけており、体部は外湾ぎみにのびる。Su6の高台は低く、体部は内湾ぎみにのび、口縁端部はさらに小さく外反する。

◀30 第2号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)



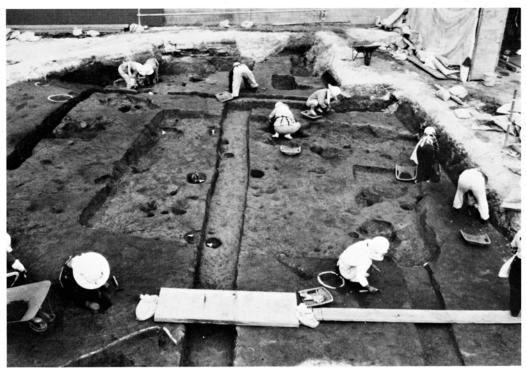
第3号住居跡 (33~41)

第3号住居跡は、第1号住居跡の南西約1.5 mの位置にある。那珂土木事務所の基礎で住居跡の中央部などが破壊されてはいるが、本遺跡では最も大型で全形を知りうる住居跡である。住居跡の中心軸はN-23°-Wである。かまどのある北壁は550 cm、南壁は560 cm、東壁は535 cm、西壁は530 cmの長さで、南北壁がわずかに長い方形プランを呈している。各コーナーは、

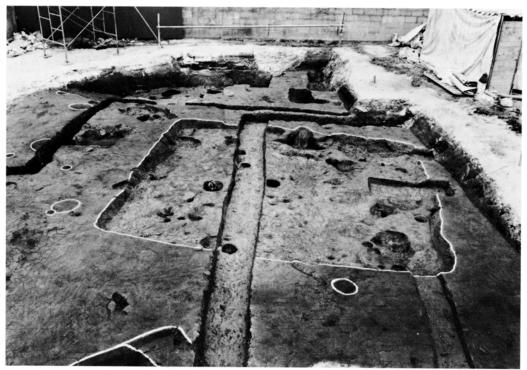
直角ではなく丸みを持っており、各壁とも直線ではなく出入りが見られる。壁は斜めに掘りこまれており、垂直な壁をなしていない。壁高は遺存状態のよい南東コーナーで20cmを測るにすぎず、後世に削平されたのであろう。壁溝は各壁とも認められない。床面は、ほぼ平担で、全面に5cm前後の厚さで張り床がなされている。床面には大小のピットがあるが、P1~4を主柱穴とする4本柱構造と推測される。またP5、6も柱列にあることから建て替え、あるいは別の構造も考えられる。



32 第3号住居跡遺物出土状況



33 第3号住居跡発掘作業風景

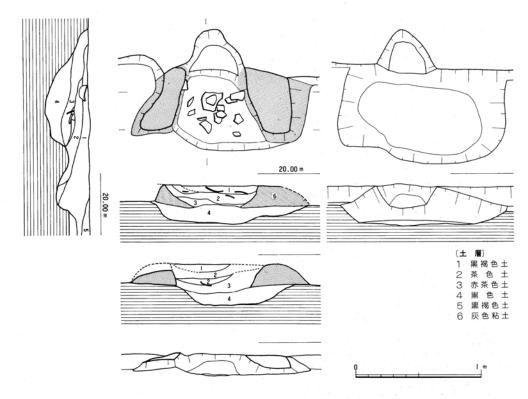


34 第3号住居跡(南西から)



35 第3号住居跡(西から)

かまど 北壁のほぼ中央に築かれている。かまどは挿図37のように、まずかまど設置場所の壁内側に90×50cmの楕円形ピットを掘りこみ、この上に灰色粘土で両袖を作っている。ピットは炭まじりの黒色土が埋っておりかまど構築時に祭祀的な行為があったことが推測される。かまどの手前側には、使用中にできたと思われる窪みがあり炭、焼土が見られた。



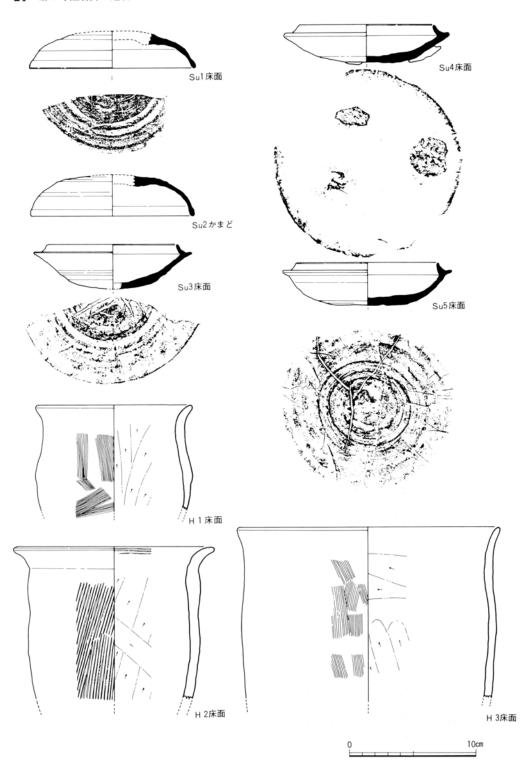
36 第3号住居跡かまど実測図(縮尺 1/30)



37 第3号住居跡かまど(南西から)



38 第3号住居跡かまど(西から)



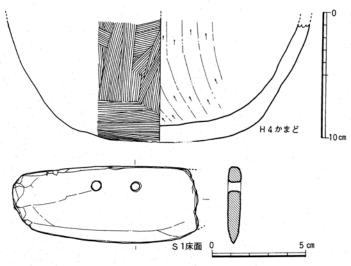
39 第3号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)

出土遺物 (39~41)

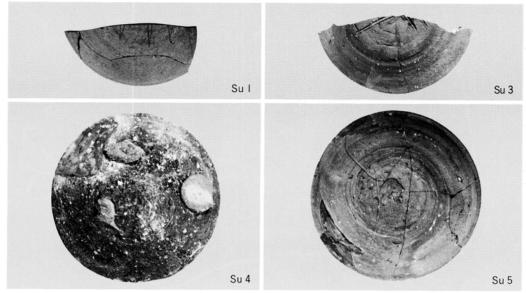
住居跡上部が削平されていることもあって覆土からの出土遺物は少なく、床面からの出土も多くはない。図示したのは須恵器 5 点と土師器 4 点の計 9 点にすぎない。ただかまどとその周辺には遺物が集中して出土した。また石製穂摘具は覆土ではなく床面直上からの出土である。 **須恵器** Su1、2 は杯蓋の小破片である。Su1 はかまど東側の土拡より出土、Su2 はかまどの袖粘土下より出土した。Su1、2 とも天井部は丸く、ヘラ記号がある。Su3~5 は杯身で、

Su 4、5 は完成品である。 3 点ともたちあがりの内傾が強く、底部にはヘラ記号がある。 Su 4

は口径11.4cm、器高は3.4cmを測る。 底部のヘラ削りは1/2以下で、受部は小さく、先端は丸くおさめている。 土師器 小型甕と大型甕の底部 4点を図示した。H1~3は同じような器形をなす。長めの体部には張りがなく、そのままのびて小さく外湾する短い口縁部がつく。H4は丸底の器壁の厚い破片で、外面は粗いハケ目、内面は縦のヘラ削りである。 石器 S1は輝緑凝灰岩製の石庖丁で、刃部は湾曲せず直線的である。



40 第3号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3 1/2)

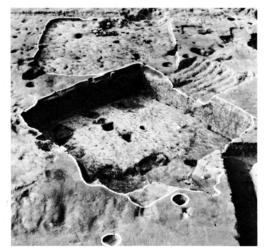


41 第3号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)

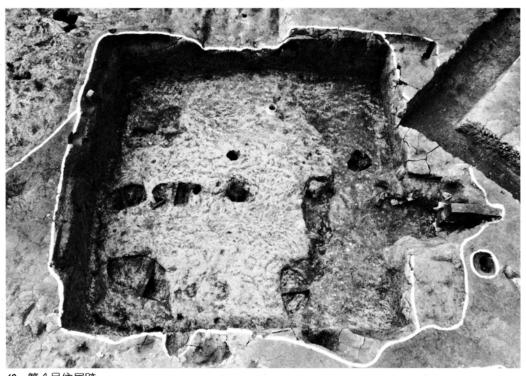
第4号住居跡(42~50)

発掘区の中央より北に寄った所で検出したもので、第3号住居跡より南に2.1 mの位置にある。かまどのある北壁の一部が基礎で破壊されているものの本遺跡では最も遺存状態がよい。 壁長は北壁が350 cm、南壁が360 cm、東壁が360 cm、西壁が370 cmの、正方形に近い平面プランで、各コーナーともに隅丸ではなく直角となっている。北壁にそって50cmの張り出しがある。

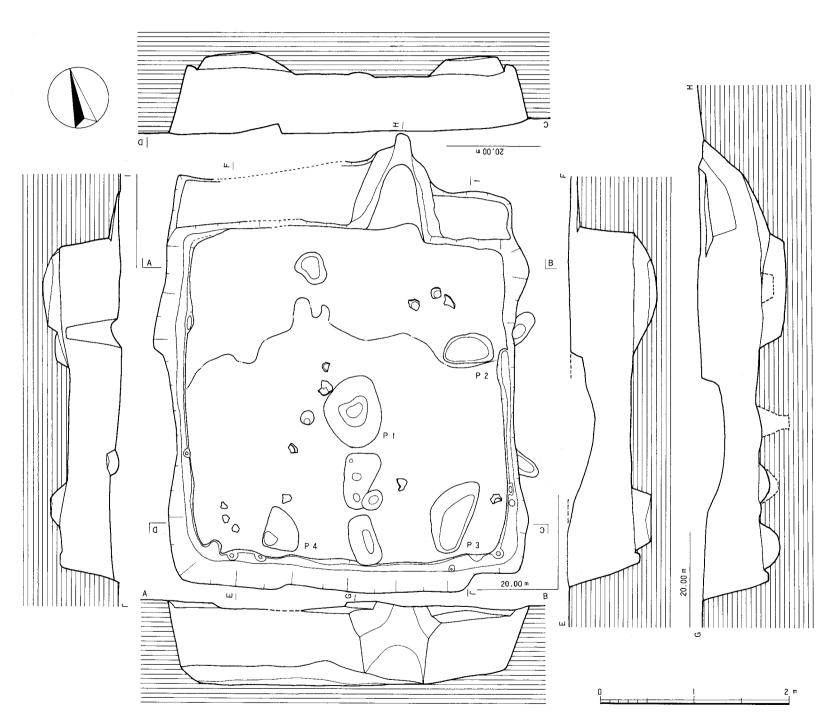
この張り出し部は深い所で10cmを測り、別の住居跡が重複しているのではなく、第4号住居跡の外部施設と考えた。各壁は垂直ではないが、いずれも70cm前後の高さである。床面には張り床が見られるが、北壁寄りは地山が約90cmの幅で一段と深く堀りこまれている。住居内に数個の柱穴を検出したが、主柱穴はP1を中心とするP2~4であろうか。壁溝は東、西、南の3壁に見られるが、北壁側は張り床のために不明瞭で確認できなかった。



42 第4号住居跡

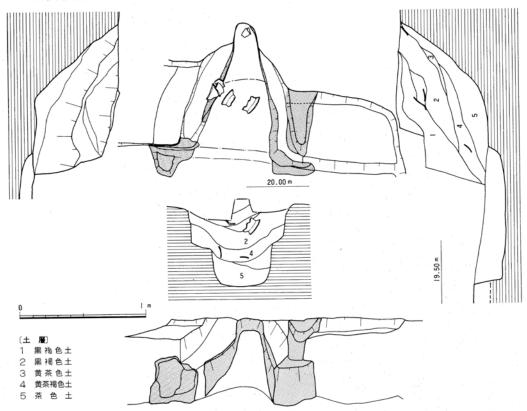


43 第4号住居跡



44 第4号住居跡実測図(縮尺1/40)

かまど きわめて遺存状態のよいかまどで、北壁の中心より南に偏した位置に築かれている。 張り床をして北壁の外側に向かって三角形に緩やかに掘りこみ、張り出し部から壁にかけて灰 色粘土を乗せてハ字形の袖を作っている。かまど本来が外側に出ているために住居空間での占 める面積を最少限度にとどめる結果となっている。



45 第4号住居跡かまど実測図(縮尺 1/30)



46 第4号住居跡かまど



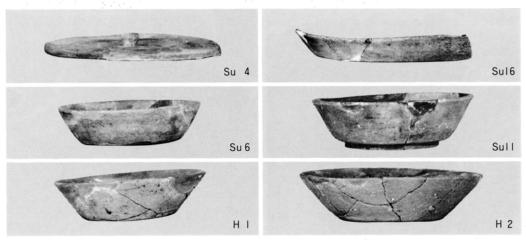
47 第4号住居跡かまど

28 第4号住居跡の遺物

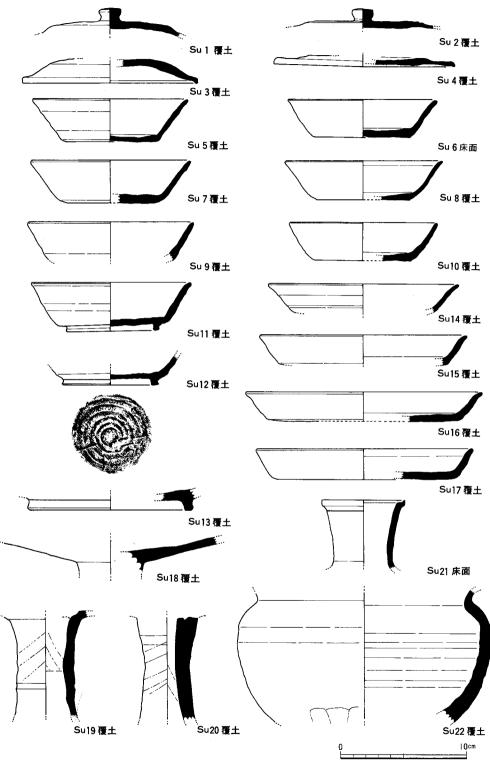
出土遺物 (48~50)

住居跡の掘りこみが深く、かつ上部削平の影響も弱いことから、覆土が厚く堆積しており、 遺物の出土も多かった。床面では中央より西壁にかけて散乱した状況で出土した。これらのう ち29点を図示した。Su6、21、H1、2が床面、H4~6はかまどより出土した。

Su1~4は杯蓋で、完形品はない。Su1の天井部はわずかにふくらみがあり、小さ なつまみを持つ。Su2も同じようなつまみを持つが、天井部はさらに平担になる。外面は横ナ デ、内面はナデ調整。Su 3 は口径14cm、口縁部は直角に小さく折り曲げる。Su 4 はまったくふ くらみがなく偏平な器形をなす。つまみの接合痕があるが中心よりずれている。口径は15cm。 Su 5~10は無高台杯で、Su 5 は口径13.6cm、底径7.6cm、器高3.4cmを測る。胎土は砂粒を多く 含んでいる。体部の立ち上がりは他に比べ弱く、直線的にのび端部はそのまま丸くおさめてい る。Su 6~8 の体部も直線的にのびるが口縁部近くで小さく外反する特徴を持つ。Su 7 の底部 は切り離しのままでナデを加えていない。Su 9、10の体部は丸く外湾ぎみにのびており、器壁 も他より厚い。Su11~13は有高台杯である。3点とも体部との境近くに高台を貼りつけている。 Su12の底部は、粘土紐のまきあげ継目がよく残っている。Su14~17は口径15.2~19.2cmの皿で ある。Su14は器壁の薄いつくりで、体部の傾きも Su15~17と異なる。Su 15~17の体部は立ち 上りで、口縁部は小さく外反する。Su16の底部は切り離し後にナデ調整。Su18~20は同じよう に高杯の破片である。Su18は杯部で、精良な胎土が用いられている。杯部内面は横ナデ後にさ らにナデ調整をしている。Su19、20は脚筒部で、杯部接合部から剝離している。Su19は脚筒部 中位に1条の浅い沈線が巡る。剝離面の観察によるとSu19、20とでは杯部の接合法は異なるよ うである。Su21、22は蓋の口縁部で、口縁部は水平に折れさらに小さく直立している。Su22は 精良な胎土が用いられた広口壺である。体部上半の内傾は弱く、反転して小さな口縁部をつくる。

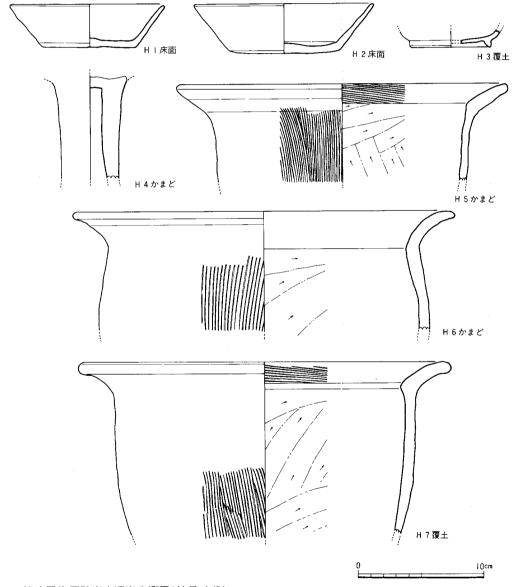


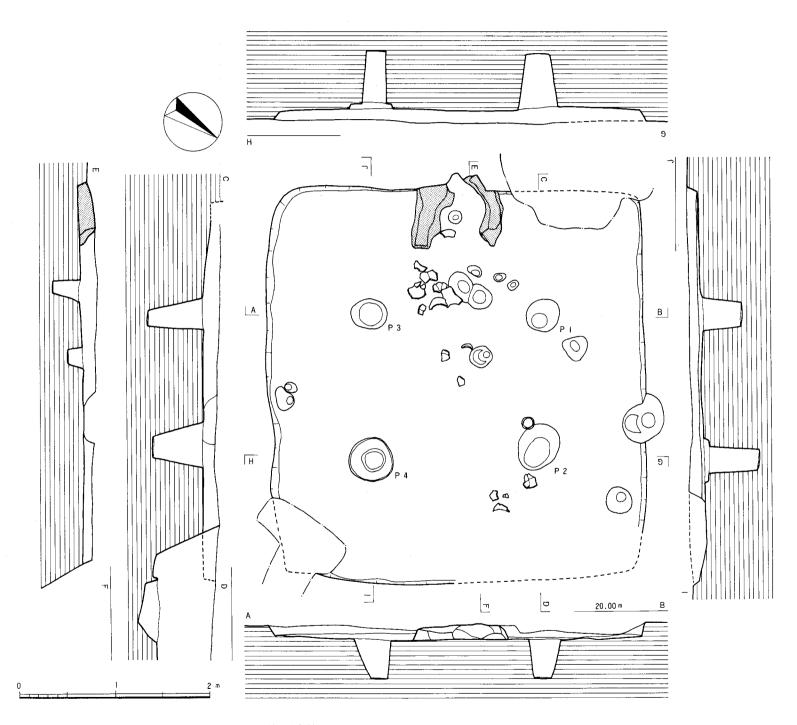
48 第4号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)



49 第4号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)

土師器 H1、2は無高台杯で、よく器形は類似している。H1は口径12.5cm、底径7.4cm、器高 3.3 cmの法量である。胎土には小砂粒が多く含まれている。H2は一回り大きい。体部は直線的に外反している。H3は有高台杯で体部の境は丸みを持つ。全体が磨耗しており調整痕は残っていない。H4は高杯の脚筒部で、外面は丁寧な横ナデ調整がなされている。 $H5\sim7$ は甕の上半部である。H5の口径は26.6cmで、く字形、口縁部は器壁が厚く直線的に外反している。H6、7のく字形口縁部上面は上方に湾曲している。H6 の体部には、わずかながら張りがあり、口縁部は長いつくりである。いずれも体部外面は粗いハケ目、内面は右上りのへラ削り。





51 第5号住居跡実測図(縮尺1/40)

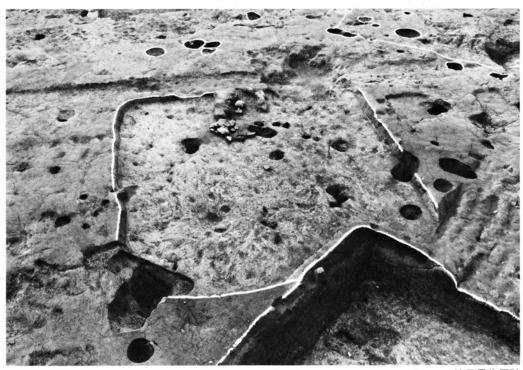
第5号住居跡(52~59)

第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡の中間に位置しており、東壁の一部が第4号住居跡によって切られている。三つのコーナーが破壊されているが各壁の推定全長は、かまどのある西壁が370 cm、東壁が360 cm、北壁が390 cm、南壁が390 cmを測る。残っている南コーナーは直角ではなく丸みがあることから隅丸方形プランの住居跡と言うことができる。しかし各壁

の遺存状態はきわめて悪く、壁の高さは18cm以下である。床面は、ほぼ水平で、この上に薄く張り床をしている。住居内には大小10数個のピットがあるが、これらのうち P1 は41cm、P2は58cm、P3は61cm、P4は53cmと他に比べ深いことや、これらが各コーナーとの対角線上に位置していることなどから主柱穴と考えられる。これらの間隔は P1と P2が 146 cm、P2と P4が 175 cm、P3と P4が 148 cm、P4と P1が 175 cmを測る。遺物はかまど付近で多く出土している。



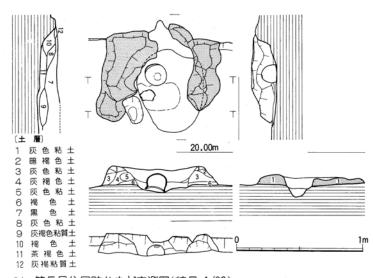
52 第5号住居跡



53 第5号住居跡

32 第5号住居跡のかまど

かまど かまどは西壁の 中央に位置している。上部 が削平されているために、 遺存状態はきわめて悪い。 袖は灰色粘土で築かれており、壁に向かって左側の袖 の長さは70cmを測る。右袖 は残りが悪く55cmの長さで ある。壁外側への掘りこみ は25cmと短いが、これは壁 が本来の高さでないためで あろう。



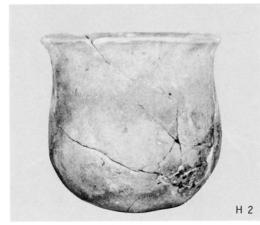
54 第5号住居跡かまど実測図(縮尺 1/30)



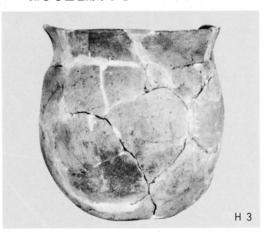
55 第5号住居跡かまど

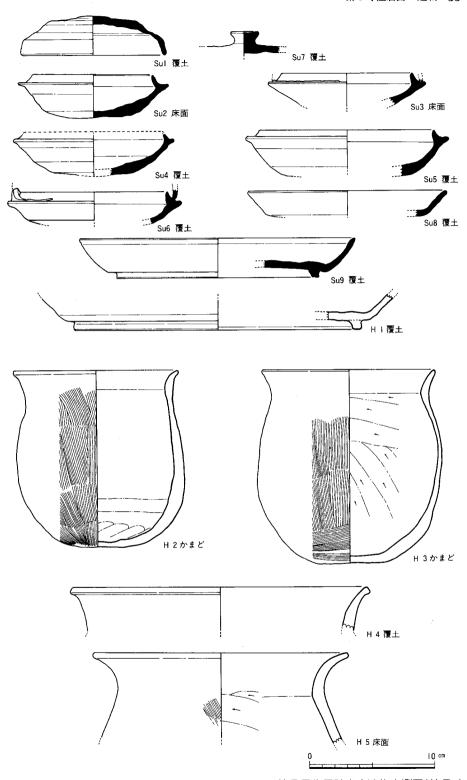


56 第5号住居跡かまど



57 第5号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)



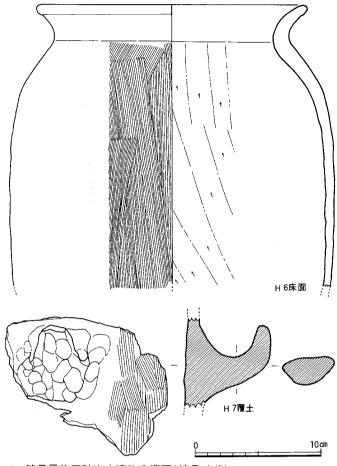


58 第5号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)

出土遺物 (57~59)

須恵器と土師器が出土したが 量的には決して多くない。それ は上部が削平されているためで あろう。出土遺物には時期的な 差があるが、新しい時期の遺物 のほとんどは覆土より出土して いる。

須恵器 Su1は杯蓋で口径は 11.8cm。天井部のヘラ削りは1/3 以下である。Su2~6は杯身でたちあがり部の内傾は大きく、受部とも小さい。Su3と6は受部に蓋の口縁部が焼成時に付着している。Su5は同じようなつくりの受部を持つが、口径は14.2 cmと大きくなっている。Su8は皿で、Su9のような高台はつかないであろう。Su9は有高台皿



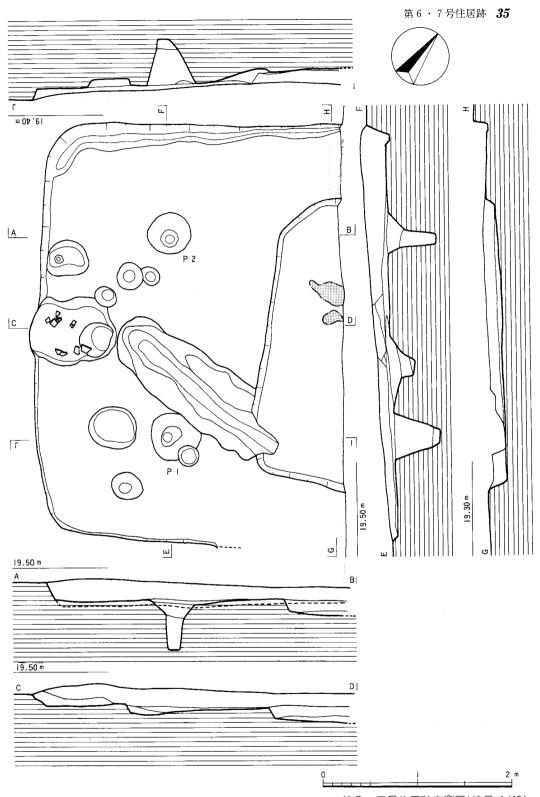
で、口径22.4cmを測る。高台は **59** 第5号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)

体部との境よりも5mm内外に貼り付け横ナデを加えている。体部内外面とも横ナデ調整。

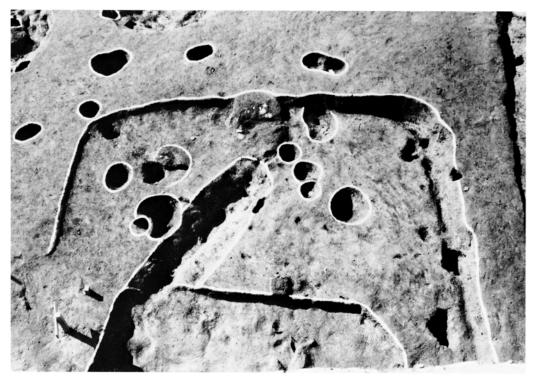
土師器 H1 な高台径23cmと大きい有高台皿で、Su9と同じように体部との境より内側に高台が付く。H2、3 は小型の甕で丸底をなす。H2 はかまどに伏せた状態で出土した。口縁部は小さく外反する。体部は細かいハケ目調整。内面は指押えで整形したのか凹凸が目立つ。H4~6 は甕の破片である。H6 はかまどの前面で押し潰れた状態で出土した。体部には張りがなく長くのび、上半部で大きく内傾し、口縁部は外反している。口頸部の器壁は厚い。H7 は甑の把手である。把手は器壁に入れこみ、指で押えて接合している。断面は逆三角形状をなす。

第6・7号住居跡 (60~66)

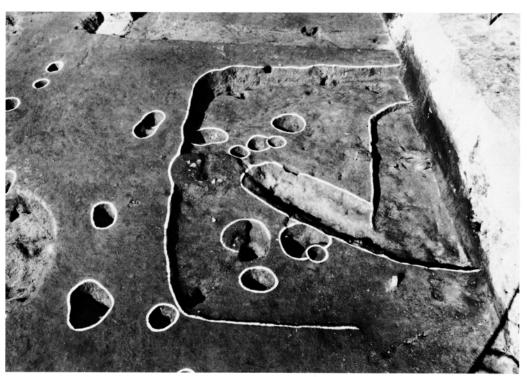
第6·7号住居跡は、発掘区の南寄りで検出したもので、第4号住居跡からは東南へ13mの位置にある。二つの住居跡は重複し東壁土層の観察では第7号住居跡が新しい。第6号住居跡の壁長は西壁だけが完全で、400cmを測る。床面は東に向かってわずかながら傾斜している。



50 第6·7号住居跡実測図(縮尺 1/40)



61 第6·7号住居跡



62 第6·7号住居跡

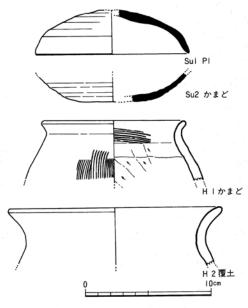
壁溝は北壁のみに認められる。主柱穴は西壁と並行にある P1、2であろう。これらの間隔は 215 cmを測る。 4本柱で柱間距離を等間隔とすれば、他の2つの柱穴は発掘区域外に出てしまうことになる。第7号住居跡は、かまどの位置がわからないが、検出した西壁の方向は第6号住居跡の西壁とほぼ並行している。西壁の長さは 270cmを測る。現在の地山は南東方向に傾いているが床面は水平である。床面には柱穴、壁溝とも見られない。

かまど 第6号住居跡のかまどは西壁に築かれている。 遺存状態はきわめて悪く、粘土ではなく焼土混じりの暗 赤褐色土が楕円形に盛り上がっているだけである。この

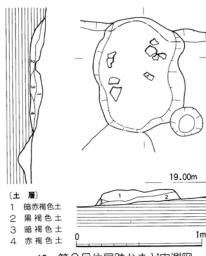
上部より数点の土器片が出土した。

出土遺物

項恵器 Su1はP1より出土した杯蓋で口径は12.4cmを測る。Su2は杯身としたが小破片のため不明。底部のヘラ削りはない。かまど出土。土師器 H1はかまどより出土した小型の甕。H2の甕は第7号住居跡の覆土より出土した。



66 第6 · 7号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)



63 第6号住居跡かまど実測図 (縮尺 1/30)



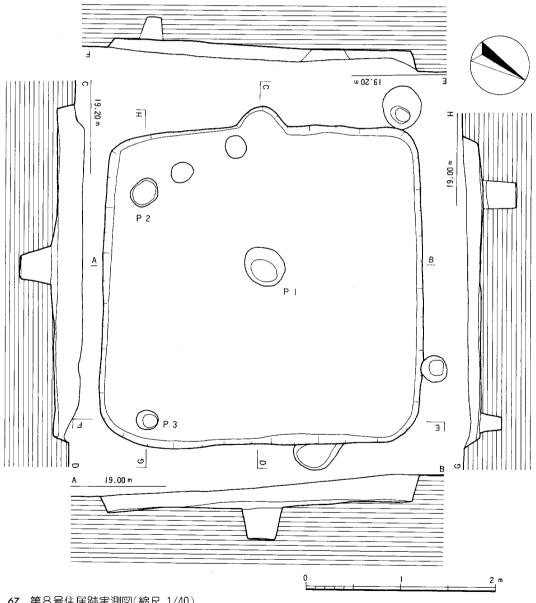
64 第6号住居跡かまど



65 第6号住居跡かまど

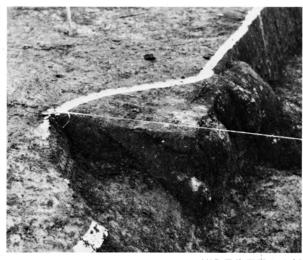
第8号住居跡

第8号住居跡は発掘区の南端部にあり、第6号住居跡の南3mの所に位置している。上部は 削平されてはいるものの4壁が完全に残っている。かまどのある西壁は315 m、東壁は310m、 北壁は 313 m 、南壁は 308 cmの長さで正方形に近いプランをなす。各コーナーは丸みを持って いる。床面は現地山面の傾斜と同じように南西側に傾いて掘りこまれている。住居跡内には、 5個のピットがあるが中央のP1と各コーナーに配されたP2、3が主柱穴であろう。しかし 北東と北西コーナーでは精査したが検出できなかった。壁溝はなく、遺物もきわめて少なかった。

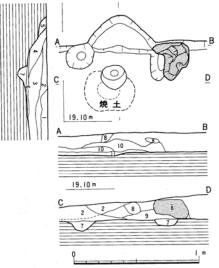


67 第8号住居跡実測図(縮尺 1/40)

かまど かまどが築かれている西壁の高さが20cmも 残っていないので、袖に使われている灰色粘土も右袖 のみに見られるだけである。両袖の下には小ピットが ある。住居跡外に三角形に掘りこみがあり、その深さ は8cmを測る。



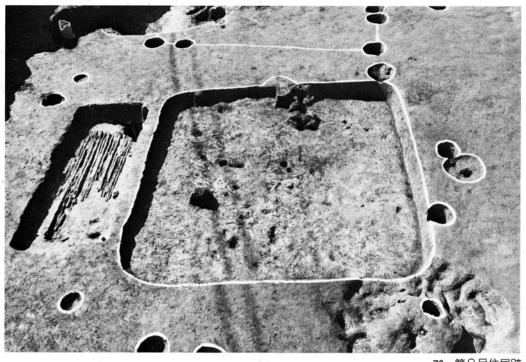
第8号住居跡かまど



68 第8号住居跡かまど実測図 (縮尺 1/30)

[土 層]

- 1 黒褐色土 2 暗褐色土
- 3 灰白色土 9 茶褐色土
- 4 暗灰色土 10 灰白色粘土
- 6 褐色土
- 7 褐色土
- 8 灰白色粘土
- 5 褐色土 11 褐色土



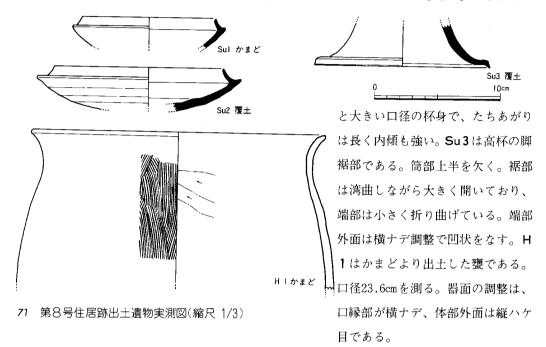
70 第8号住居跡

40 第8号住居跡の遺物

出土遺物 (71)

小破片でも図化するように努めたが図示しえたのは4点にすぎない。これらのうちSu1とH 1がかまどから出土。Su2、3は覆土出土である。

須恵器 Su1は杯身で口径は10.6cmを測る。受部は小さく、たちあがりも短い。**Su2**は12cm

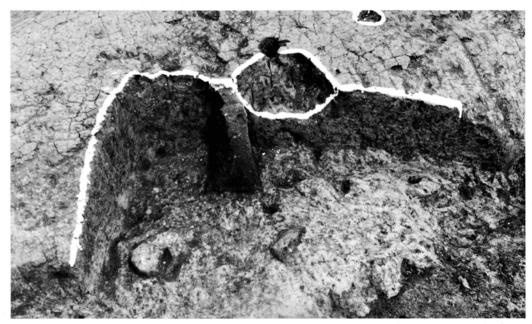


A 20.00 m B B 20.00 m B C 2 m C 20.00 m B C 2 m

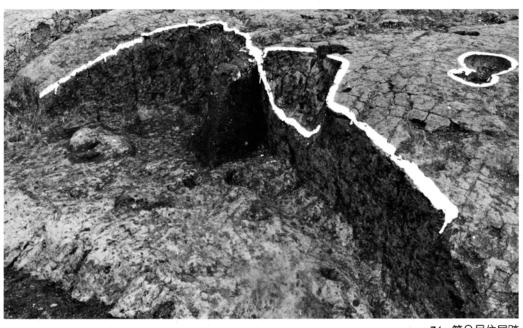
第9号住居跡

 $(72 \sim 74)$

発掘区のの境界に対しているのでではない。 発掘地山が水体のではないではないではないではないがでいるのでではないではないがでいるのでではないがでいるのでではいるのでではいる。 発掘地山が水体でいるのではいるのではない。 発生はいるのではいるのでははいるのでははいい。 ははいるのではいるのではいるのでははいる。 はいるのではいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいるのではいるのではいる。 はいるのではいるのではいる。 はいるのではいる。 はいるのではいる。 はいるのではいる。 はいるのではいる。 はいるのではいる。 はいるのではいる。 はいるのでは、 はいるでは、 はいるでは、 はいないるでは、 はいない。 はいない。 はいないないない。 はいないないない。 はいないないない。 はいないないないないないないないないない が 110 cm、東壁が 220 cmである。壁はコーナー部で30cmあり、壁自体は今回検出した 9 基の住居跡のうちでは残りのよい住居跡に入るであろう。床面は水平をなす。床面には 2 か所に灰色粘土が見られただけで遺物の出土も皆無であった。したがって第 9 号住居跡の時期を知りうる遺物はない。住居跡の方向としては第 1 、 2 号住居跡の方向に近い。



73 第9号住居跡

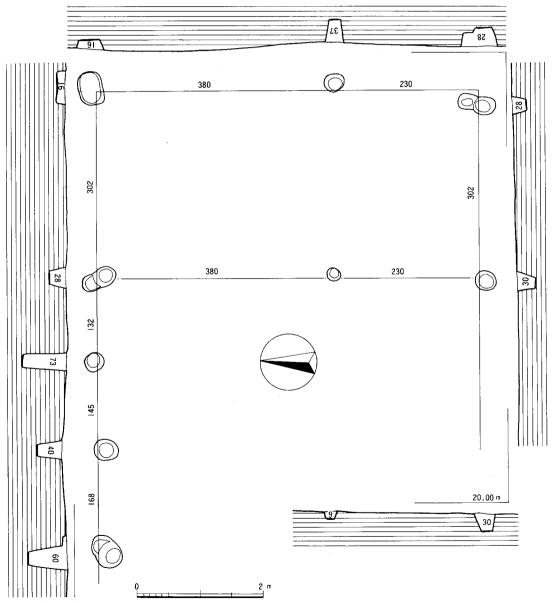


74 第9号住居跡

(2) 掘立柱建物跡

地山と遺構覆土との識別は容易だったためにピットなど遺構の掘り残しはない。しかしピットの個数からして多くの掘立柱建物が建っていたものと推定されるが、確認できたのは 4 棟にすぎない。これらの掘建柱建物跡も柱間が均等なものはない。

第1号掘立柱建物跡 (75~77) 発掘区の西北隅に位置する。建物の西北側は発掘区域外に出ているために全体は不明。東西棟で柱間、柱穴の深さともにばらつきがある。



75 第 1 号掘立柱建物跡実測図(縮尺 1/60)



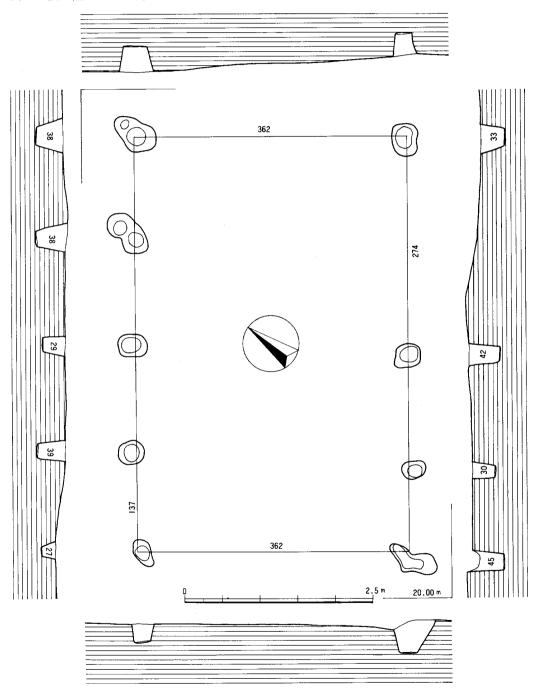
76 第1号掘立柱建物跡



77 第1号掘立柱建物跡

44 第2号掘立柱建物跡

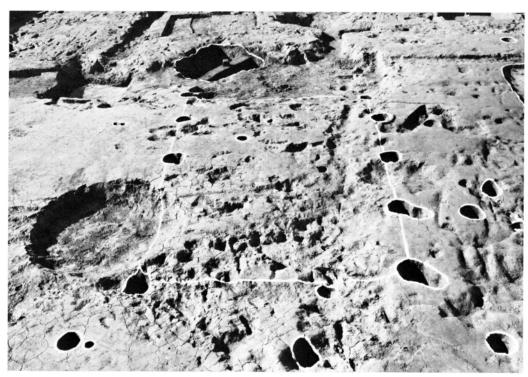
第2号掘立柱建物跡(78~80) 発掘区の中央部に位置している。1×4間の東西棟建物である。桁行は全長550 cmあり、柱間は137 cmの等間隔に近い。梁行は362 cmを測る。南側柱列は4個の柱穴のみが残っているが、もう1個は後世に攪乱を受けて消失している。



78 第2号掘立柱建物跡実測図(縮尺 1/50)



79 第2号掘立柱建物跡

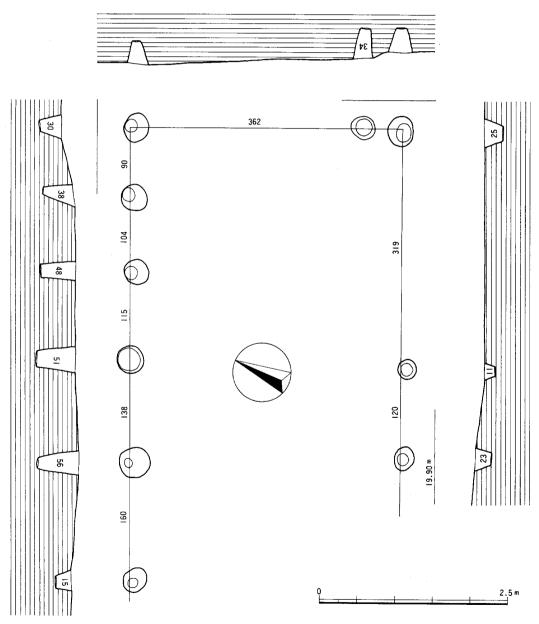


80 第2号掘立柱建物跡

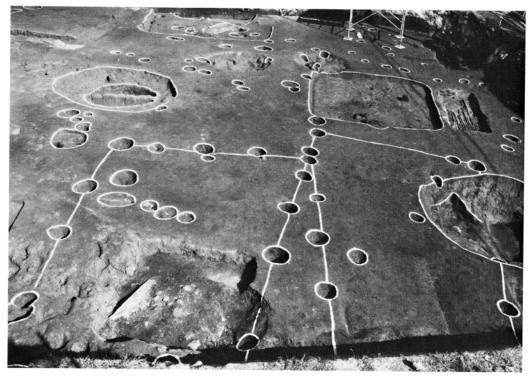
46 第3号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡(81~83)

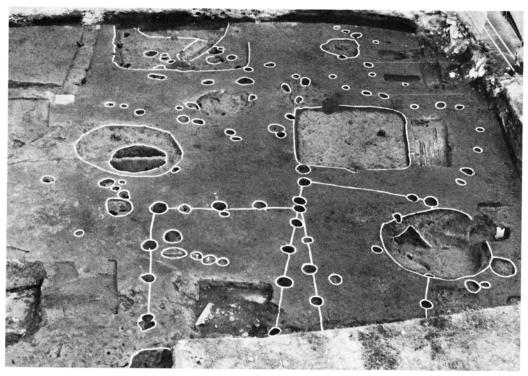
発掘区の南西隅で検出したもので、第8号住居跡の西側1mに隣接した位置にある。西側柱列が発掘区域外に出ているために規模は確認できない。検出部で桁行長は北側柱列で607cm、南側柱列で439cmを測る。梁行長は362cmである。1×5間以上の建物であるが北側柱列の柱間は、90、104、115、138、160cmと等間隔ではない。柱穴は径40cm前後の円形で、柱の深さは地山が削平されており同じではないが、柱穴の底部はほぼ同レベルである。



81 第3号掘立柱建物跡実測図(縮尺 1/50)



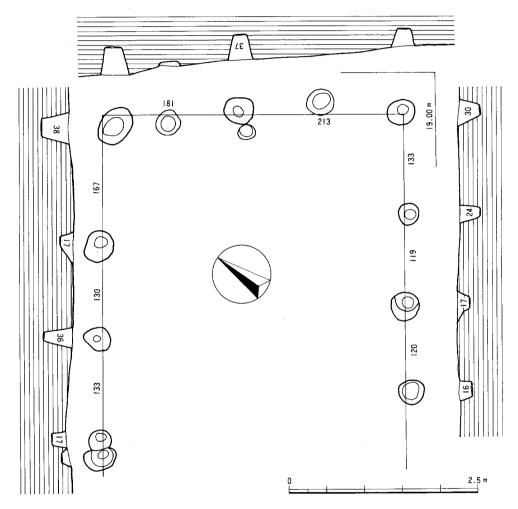
82 第3·4号掘立柱建物跡



83 第3·4号掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡(83、84)

第3号掘立柱建物跡と重複している。同じように西側柱列が発掘区域外にあるために規模は不明。3×4間以上の東西棟建物である。桁行の長さは432 cm以上、梁行の長さは400 cmを測る。柱間は、各柱列ともに等間隔ではない。



84 第4号掘立柱建物跡実測図(縮尺 1/50)

これら4棟の掘立柱建物跡の柱穴からは、遺物の出土は少なく、かつ細片であったために時期を決定するにな至らなかった。

(3) 竪 穴

竪穴は発掘区の中央より南側にかけて3基を検出した。

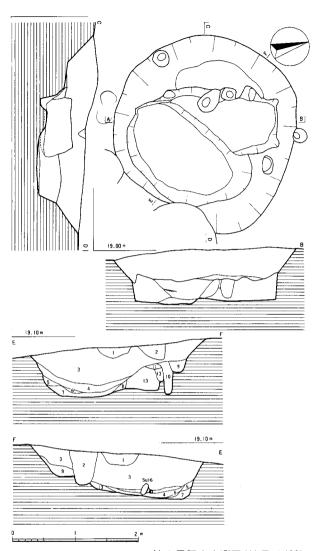
第1号竪穴(85~92)

第1号竪穴は発掘区の南隅に位置す る。第3号掘立柱建物跡と重なってい るが、第1号竪穴の覆土に柱穴が掘り こまれていることから、両者の先後関 係を知ることができる。竪穴のプラン は不整円形で 294 × 317 cm を測る。土 層を実測しながら発掘していったが、 土層によると1~8層と9~13層の二 つに分けられる。須恵器などの遺物は 1~8層から出土し、特に3層下部に 集中している。9~13層からは遺物の 出土はない。また竪穴の壁は角度をも って掘りこまれ、中位より垂直近くに 変っている。これらのことから時期の 異る遺構重複の可能性があり、慎重に 掘り下げた。この結果、竪穴の底部に 切りこまれた長方形の平担部を検出し た。長側は 200 cm、短側は 100 cm、高 さは45cmを測る。両長側壁は木棺墓の ように短側壁に5cm入りこんでいる。

出土遺物 (88~92)

須恵器と土師器が多量に出土したが 他遺構よりも完形品や大型破片が多い のが特徴である。

須恵器 杯蓋4点、杯身9点、高杯3 点、隧1点、甕1点の18点を図示した。 Su1~4 は杯蓋である。いずれも体部の



85 第1号竪穴実測図(縮尺 1/60)

[土 層]

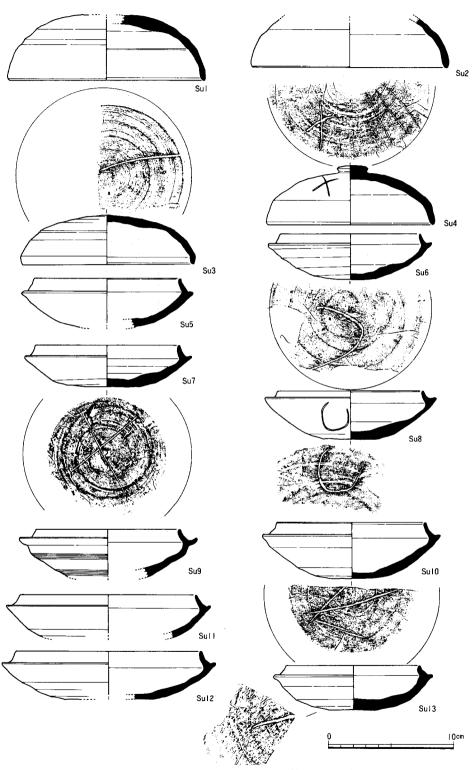
- 1 灰褐色粘質土 砂礫混り
- 2 黒 色 土 やや褐色ぎみ
- 3 黒 色 土 土器片含む
- 4 黒 色 土 茶色粒土を多く含む
- 5 暗褐色土
- 6 褐 色 土
- 7 黒 色 土 やや青み
- 8 赤 茶 色 土 地山粒土を多く含む
- 9 暗灰褐色土 褐色粒土混り
- 10 黒 色 土 しまり悪い
- 11 暗灰褐色土 褐色粒土混り
- 12 褐 色 土
- 13 黒褐色土



86 第1号竪穴



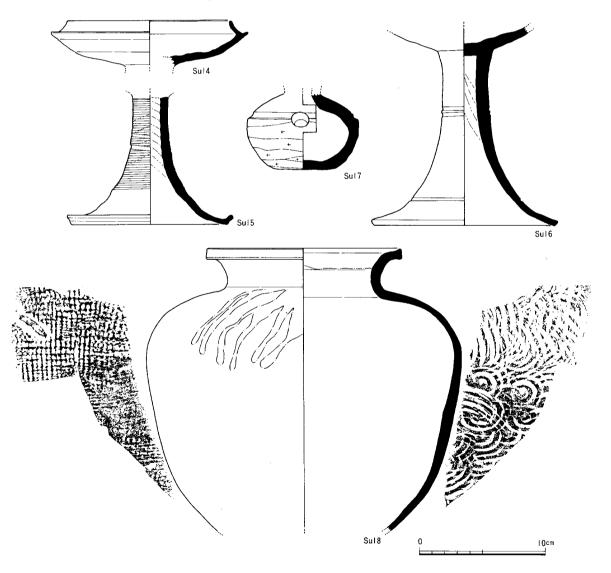
87 第1号竪穴



88 第1号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)

52 第1号竪穴の遺物

境が明瞭な境をなさない。Su3の口径は13.8cm、器高は3.9cmで、体部は垂直に立っている。天井部のへラ削りは全体の1/2弱を占めている。天井部にはヘラ記号が見られる。Su4は偏平なつまみを持つ。口径は13.5cmで、天井部は2か所にヘラ記号がある。Su5~13は杯身である。Su5の受部は小さく水平に突出しており、たちあがり部は内傾が強く、その先端近くで上方に小さく屈曲している。底部のヘラ削り痕は明瞭でない。Su6、7、8、10、13は底部にはヘラ記号が見られる。Su10~12は口径が大きく、たちあがり部の長い杯身である。たちあがりは、中位で屈曲している。底部のヘラ削りは1/2以上を占めている。Su13は逆に口径が10.8cmと小さい杯身で、受部、たちあがりも短い。また器壁の厚いつくりをなす。Su9は、受部が水平ではなく湾曲して

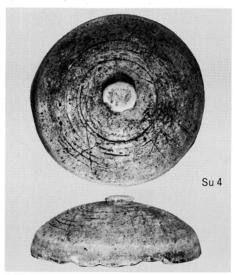


89 第1号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)

おり、底部はカキ目調整。Su14~16は高杯である。 Sul4は杯部で脚部との接合部より剝離している。受 部は水平ではなく、たちあがりは1.5cmと長い。口縁 部と外面の調整は横ナデ。杯部内底にはナデを加え ている。口径13.0cm。**Su15**は脚部で、堅緻な焼成と なっており内面は灰色、外面は灰黒色を呈する。筒部 から大きく開いて裾部となり端部は斜め上方に折り 曲げている。端部外面は横ナデし凹線状をなす。筒 部外面はカキ目調整後に2条の沈線を巡らしている。 内外面ともにしぼり痕がよく観察できる。Su16は杯 部の一部が残っている。焼成は完全でなく淡灰色を 呈する。脚部の底径は14.7cm、高さは14cmを測る。裾 部は緩やかに大きく開いているが、端部は折り曲げ ずにそのままおさめている。調整は横ナデ。筒部の中 位に2条、裾部上方に1条の沈線がある。杯部内底 はナデ調整。Su17は 聴で口頸部を欠いている。体部 は球形ではなく、底部が平担に近く安定感がある。体

cmを測る。上半部は湾曲せずに直線的に内傾し締った頸部をなす。外面の調整は上半が横ナデ、下半はヘラ削りである。体部中位よりやや上に幅広の沈線を巡らして、ここに径1.4cmの小孔を穿っている。Su18は第4層の黒色土より出土した。底部を欠いているがほぼ全形を知りうる甕である。体部の張りは上位にあり、頸部は短く内湾し口縁部をつく突

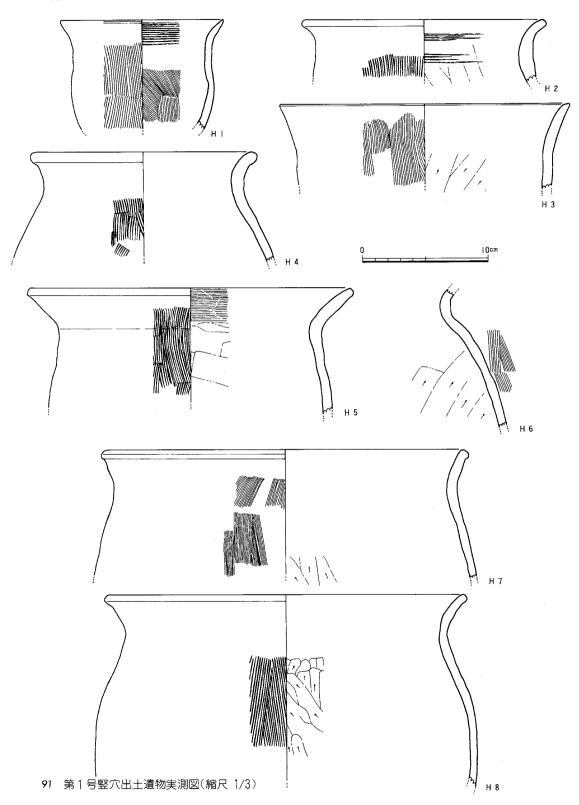
部の最大径は中位にあり、9



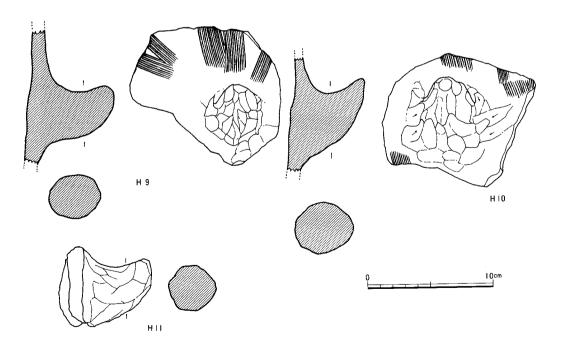




90 第 1 号竪穴出土遺物(縮尺 1/3)



出して外端は垂直に落としている。口縁部から体部上半の肩部にかけて厚く自然釉がかかってい る。体部の調整は内面は同心円文叩き、外面は格子文叩きである。口径15.4cm、体部最大径26.2cm。 土師器 H1は口径13cmの小型甕で底部を欠いているが丸底をなすのであろう。体部に張り がなく、口縁部は直線的に外反して口端部は尖り気味となっている。H2は器壁の厚い口縁部 破片で、内面は横ハケ目は後に横ナデ調整を加える。H3の 口縁部は H1に 類似している。体 部は湾曲せずに底部へ続くのであろう。口径23.4cmで口縁部の横ナデ調整後に体部のヘラ削り とハケ目調整を施している。 H4の体部上半は内傾して頸部をつくり反転して丸みのある口縁 部がつく。口径18cm。H5はく字形に外反する口縁部がつく。体部内面は左上りのヘラ削り、 外面は縦の粗いハケ目調整。口径は26.2cmを測る。H6は体部上半の小破片のために径は不明。 その傾きは H 4 に近い。調整は外面が縦ハケ目、内面は右上りのヘラ削りで幅は約1.8cmある。 H7 は小砂粒の多い胎土が用いられ、赤茶色を呈する。体部上半の締りはなく、直線的に外反 する口縁部が続く。端部は強く横ナデして折り返したように下方に垂れている。体部内面のへ ラ削りは左上がりの方向で、口縁部より9㎝下方より施されている。全体的に調整は丁寧であ る。口径は29.8cmを測る。H8の体部はH7に比べふくらみがあり、口縁部の外反も強い。口径 は28.5cm。体部外面は縦のハケ目調整、内面は細かい左上りのヘラ削り。H7、8の外面には 煤の付着はないが甑か。H9~11 は甑の把手である。3点とも胎土、手法の違いから同一個体 の把手ではない。H9、11の先端が丸いのに対し、H10は先細く成形されている。



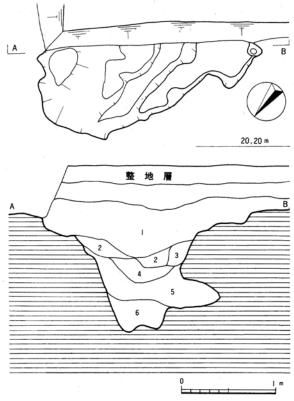
92 第1号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)

第2号竪穴(93~96)

第2号竪穴は第1号竪穴の北西7mにあしA
り、大部分が発掘区域外に出ている。第4
号掘立柱建物跡の北側柱列がのびており、
両者の先後関係を判断できる部分であったが、すくなくとも覆土中においては確認できなかった。プランは不整形で、周囲の壁は、上部が緩やかに掘りこまれ、途中より傾斜が強くなっている。壁、底部ともに凹凸がある。遺物の出土は第1層黒色土の下部に集中している。この層は遺跡全体を覆っている層である。断面図によると、地山の変化にそって横に壁が入りこんでおり、ある程度の湧水があったことも考えられよう。

出土遺物

部分的な検出に止まったが遺物の出土は 多く、須恵器12点と土師器14点を図示した。 **須恵器 Sul**は杯蓋で口径は15.2cm。天 井部はわずかにふくらみがある。体部との



93 第2号竪穴実測図(縮尺 1/40)

〔土 層〕

- 1 黒 色 土
- 4 黒褐色土
- 2 黒色土
- 3 黒褐色土
- 5 暗茶褐色土







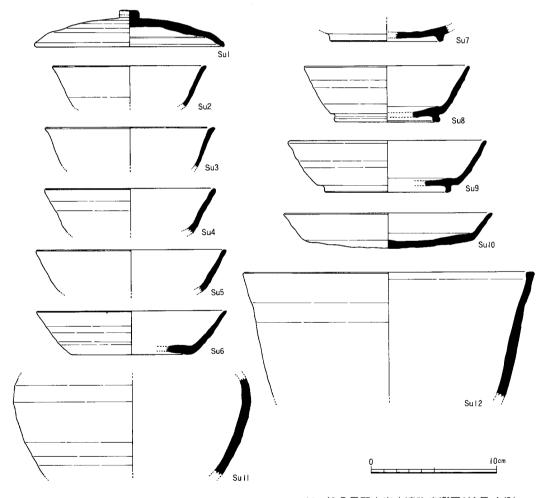


)

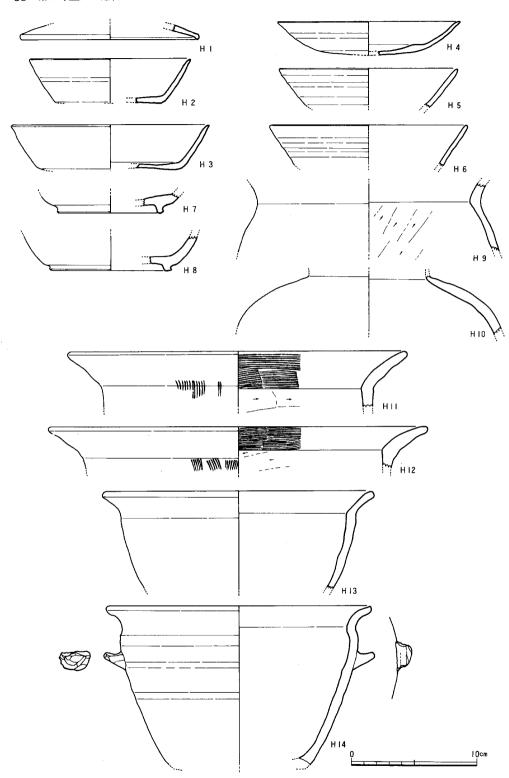
H 3

94 第2号竪穴出土遺物(縮尺 1/3)

境は屈曲しているものの明瞭な段はなさない。端部は折り曲げずに内面に浅い沈線を1条巡らしている。また体部屈曲部内面にも見られる。天井部には背の低いつまみがつく。Su2~6は杯で底部が残っているのはSu6のみである。Su2~5の体部は、ほぼ同じ傾きをなし口端部は丸くおさめている。Su3の口端部は上面を外側に引き出している。4点とも調整は丁寧で堅緻な焼成となっている。口径は12.4~15.4cmを測る。Su6の体部の傾きは弱く、その長さも4.3cmと長い。横ナデ調整であるが外面は細かい凹凸がある。Su7~9は有高台杯である。Su7は高径9.2cm、内底は横ナデ後にナデ調整。Su8の高台は体部との境より内側に貼りつけている。Su9の体部は底部と明瞭な境をもつ。横ナデ調整はきわめて丁寧である。口径16cm、高台径10.4cm、器高4.1cm。Su10の皿は口径16.6cm。底部は平担でなくふくらむ。焼成はよく灰色を呈する。Su11は鉢で口縁部と底部を欠く。最大径は中位より上方にあり、下半分はヘラ削りである。Su12は体部が直線的にのび、そのまま平担な口縁をつくる。横ナデ後に内面はナデ上げる。



95 第2号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)

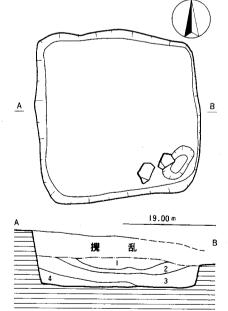


96 第2号出土遺物実測図(縮尺 1/3)

十師器 **H1**は杯蓋の小破片。精良な胎土を用いている。口縁部は折り曲げたのではなく、 横ナデで内面に浅い段をつくる。H2~5は杯。H2は口径13cm、底径8.4cm、器高3.5cm。 軟質の焼きのためか器面は磨耗し調整痕は不明。H3の口径は16cm、体部は底部から丸みをも って屈曲して直線的にのび、口端部でさらに小さく外反する。底部は切り離し後にナデを加え ている。H4は丸底杯で、口径は14.6cmを測る。丸底杯はこの1点のみである。H5、6はい ずれも底部を欠く。口径は H5 が14.4cm、H6 が16cmである。H10 は壺肩部の破片のために全 形を知りえない。頸部はよく締り、屈曲部は丸みがある。この部分の器壁が薄くなっている。 H9、11~14は甕。H9は甕の体部上半で、く字形に外反する口縁部がつく。小破片のために 傾きが不正確であるが、体部の張りはさらに小さいか。H11、12は同じような形状の口縁部を 持つ。体部上半は直線的に立ち、屈曲して口縁部がつく。屈曲部の内面はにぶい稜がある。H 11の調整は、体部外面の縦ハケ目後に横ナデ調整。内面は右方向のヘラ削り。口縁部内面の横 ハケ目は右から左の方向である。H12は口縁部内面の横ハケ目調整後に体部内面のヘラ削りを している。H13は口径22cm。く字形口縁部から体部は張りのないまま底部へと続く。口縁部は 強く横ナデしており屈曲部で小さな段がつく。体部外面は横ナデ後に上下にナデている。H14 は赤茶色を呈する甕で、口縁部から頸部にかけてS字形をなす。頸部近くに小さな把手を貼り つけている。体部は細かいミガキ風の横ナデ調整。底部との接合部で剝離している。

第3号竪穴 (97、98)

第3号竪穴は第2号掘立柱建物跡の西1.5 m に位置している。プランは隅丸方形で、東側は



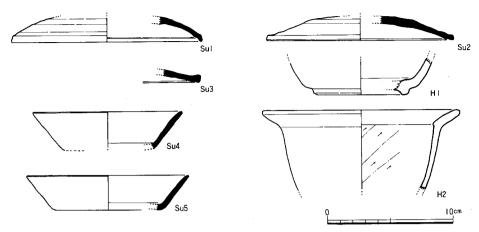
97 第3号竪穴実測図(縮尺 1/40)

削平されている。各壁の長さは東壁が150cm、西壁が168 cm、北壁が158 cm、南壁が148 cmを測る。各壁はほぼ垂直に掘りこまれており、遺存状態のよい西壁で57cmの高さである。底部は平担であるが、南コーナーには床面より掘りこまれた楕円形ピットがある。竪穴の覆土はレンズ状に堆積しており、最下層の4層は現在の地山傾斜と同じように北より南に向かって堆積している。覆土と底部より数点の遺物が出土した。

須恵器 Su1~3は杯蓋。Su1の天井部は丸みがある。 口縁部は小さく折り曲げており、内面に段をつけている。

[土 層]

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土



98 第3号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)

Su 2 も同じように天井部を欠く。口縁部は外に開き折り曲げは弱い。Su 3 は口縁部の小破片で口径不明。口縁部は折り曲げで肥厚し偏平な天井部をつくる。Su 4、5 は無高台杯。Su 4 の口径12cm、推定器高 3.1 cm。Su 5 は口径13.2cm、底径8.6 cm、器高2.3 cm。底部から丸みを持つて屈曲し体部は直線的にのびる。横ナデ調整は丁寧である。H 1 は有高台杯。器壁の厚いつくりで高台は体部の境より内側につく。器面は磨耗しており調整痕不明。H 2 はく字形口縁の小型甕。屈曲部内面は内側に小さく突出する。器面は磨耗して 2 mm大の砂粒が露出している。

第3章 小 結

これまで竪穴住居跡、掘立柱建物跡、竪穴の順に各遺構とその出土遺物について記してきた が、次に調査の成果と問題点を整理して、まとめとする。検出した9軒の竪穴住居跡は、出土 遺物から第3、5、6、7、8号住居跡の5軒が6世紀後半、から7世紀にかけて。他の3軒が 7世紀後半から8世紀の大きく二つの時期に分けられる。いま前者をA期、後者をB期とする と、A期の5軒は第6号と第7号が切り合っており先後関係にあるが、第5、6、8号住居跡 はかまどの位置や住居跡の方向が一致するなど共通点が多く、その位置も著しく接近していな いことなどから同時期に営まれていた可能性がある。第3号住居跡は規模も大きく、かまどの 位置も異なるが出土遺物には時期差は認めがたい。B期は第1号と第2号住居跡は切り合って いるが短時間のうちに建て替えられている。第9号住居跡は遺物が出土していないために時期 が確定できないが、その方向はB期の住居跡に類似している。同じように時期不明の掘立柱建 物跡もその方向のみからすれば、第2号掘立柱建物跡がA期、他の掘立柱建物跡がB期に当ろ う。3基の竪穴も第1号竪穴がA期、第2、3号竪穴がB期となる。A期とB期の各遺構は継 続して営まれたのではなく、断絶する期間がある。また本遺跡の包含層より出土する遺物はB 期より特に新しい遺物はなくB期以降は現代まで生活面としての土地利用はなされていないよ うである。予想に反して弥生時代の遺構、遺物は皆無に近く那珂台地や春日丘陵に分布する遺 跡としてはきわめて特異な遺跡であるということができよう。

福岡市博多区

南八幡遺跡群(Ⅱ)

月から遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第128集 © 1986年 3 月31日発行

編集 発行

福岡市教育委員会 福岡市中央区天神一丁目 7 -23 電話(福岡) 7 1 1 - 4 6 6 7

印刷 ダイヤモンド印刷(株) 電話(福岡) 621-8711

